家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

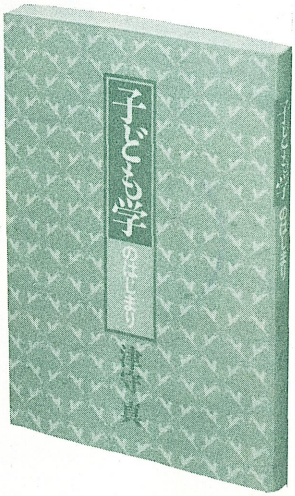
3

54.2.24
関西学院大学
図書館

第七十八巻　第三号　日本幼稚園協会

好評発売中！

子ども学のはじまり



津守　真著

定価　1,200円
B六判　296頁

保育の根本を探る……

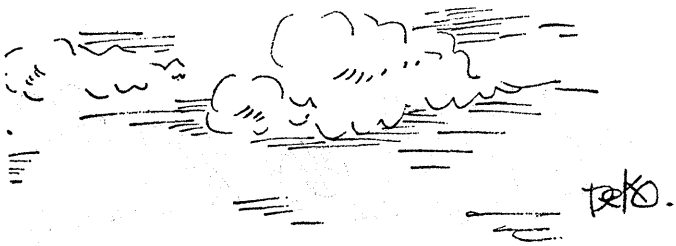
生きた子どもの生活にふれ、子どもとともに楽しむ。一見何でもないようなこの瞬間に、大人は、子どもの世界にひきこまれ、「子ども学」へのたびだちをします。

「科学的」という名のもとに子どもを対象化しすぎていた研究のあり方を反省し、子どもの行動を人間の現象として考える「子ども学」は、これからの保育研究に新たな光を投げかけます。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八巻　第三号



幼児の教育　目次

——第七十八巻　三月号——

表紙　油野誠一
カット　中島英子

© 1979
日本幼稚園協会

人　形……牛島義友…(4)
人形と子どもたち……土橋光子…(6)
人形物語さまざま……矢川澄子…(8)
〝DOLL〟……上村陽子…(10)
〝ふれる〟厳しさ……竹田扇之助…(12)
ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その七）……海老沢　敏…（14）
私の幼児教育論（二）……佐々木正美…（21）
私の保育……金子房子…（26）
復刻・幼児の教育……（32）

青い目の人形使節……有吉国子…（34）
お人形……南沢明子…（36）
雛の職人衆……皆川美恵子…（38）
二つの人形研究紹介……清水いく子…（40）

大人になってゆく子ども
成長発達のリズムと教育（下）
——子どもの「自然」を考える——……伊藤隆二…（44）
保育の体験と思索
——子どもの世界の探究——（二十四）……津守　真…（51）
史料紹介
『マイ・ダイアリー』①……エリザベス・ギャスケル
笹川真理子訳…（58）

人形

牛島義友

人間の特徴として言語の自由な使用があげられるが、それと同じ程度に人形を持つのは人間の特質であるとも云えよう。

人形で遊ぶのはただガラガラなどを持って楽しむのとは訳がちがう。ガラガラで遊ぶのは、視覚、聴覚、触覚などの感覚を楽しんでおるのであり、この場合にはこの感覚を刺激するものに子どもが直接ふれていることが必要である。人形は文字の示すように、人の代表物である。実際のお母さんの代りのもの、実際の友達や赤ちゃん、あるいは犬の代りとなっているものであり、これを持って遊ぶことによって実際の母や友達などと遊んだ気になるものである。すなわち現実のものにふれたり交渉するのでなく、その代りとなるもので、現実（ほんと）の場面を思いおこして楽しむ媒介物である。人形は実際のもののシンボルである。

言葉もこれと同じ意味でのシンボルである。〝いぬ〟という音を聞いただけで、現実の犬を思い浮べ、それについて色々と心の中でこわがったり楽しんだり勝手に想像することができる。このようなシンボルを持つには子どもの心がある程度発達しなければできない。子どもの最初の段階は感覚運動的段階と云われるが直接ものにふれ、体を動かすことによって経験を深めていく段階であるが、三歳頃になると心の中で現実の体験を再生したり、言葉を使って想像の世界に遊ぶことができる。この時代は言語が急速に発達する時期であるが、人形やごっこ遊びが大好きな時代でもある。言語と人形とは同じシ

ンボルを理解しそれを操作して楽しむものである。言葉の指導のためにも子どもが人形やごっこ遊びを楽しむ段階に入っていることが必要であり、言葉の治療教育の場合は音の聞き分けや、発音訓練よりも make-believe や想像を楽しむ状態を設定することが重要であると考えられる。

一方人形遊びと云っても色々の段階が考えられる。幼児はよく寝る時にはいつもの持ち慣れた毛布や枕がないと承知せず、これらに異常な愛着を示すことがある。この場合にぬいぐるみ人形が同じ役割をとることもある。この場合には人の代用物としてのシンボル的の意味よりも直接感覚的な愛着物であることの方が多い。思い出のまつわりついたものと云うよりも母親の暖かさや香りがそのまま波及しているものである。これに対しお母さん、子ども、赤ちゃんなどの人形をそれぞれ使い分けてままごと遊びをしたり、着せ代えたりして楽しむ場合は、現実の人間関係や生活行動を代用したり再現して楽しむ。ここでは直接手をふれ、もてあそぶ。したがって、おもちゃにしている。これに対し雛人形などは手をふれたりおもちゃにすることが許されない。かざりつけの段階でもお母さんがかざるのを見ているだけである。しかし見るだけでも豪華な宮廷生活が想像され、物語の中で王子様、お姫様に出会ったような気持になり、さらに官女や五人ばやしや、ひしもちなどの色々のいわれを知ることによって、想像生活はますます拡大される。直接手にふれるよりも、抽象化された想像とか想い出、伝統の世界への追慕となる。したがって子どもの世界だけでなく、大人の世界にまで広がってくる。

したがってこのような一つの民族の文化にまで高まった人形文化を吾々が持っていることは誇りと考えてよかろう。人形やおもちゃを持たない子ども達は不幸である。子どもがもてあそぶおもちゃだけならば、自然物や日用品の廃物でも結構役に立つ。しかし子どものためを思ったおもちゃをわざわざ作り、これを与えてやる社会は子どもを愛する社会である。しかしこれをさらに伝統文化にまで高めてくれた民族は子どもの世界を尊重した民族として誇ってもよいのではなかろうか。

人形と子どもたち

土橋光子

私が二歳半ぐらいの時の写真に人形を背にくくりつけたと言うような格好で夏の蔵座敷の真中で昼寝をしているものがあった。この寝姿が娘の道の丁度三歳頃の仕種と重なりあって時々おもい出される。

大きな鈴を背につけてもらい、もみじのような両手を後腰にあてて体をゆりあげゆりあげ歌う子守りうたが、いまも耳の奥にその抑揚を残してくれている。

ねんねん　こりよ　おこりいよ

ねんねんこりいよ　ねんこうり

「こりよ」は「ころりよ」で、「おこりいよ」は「おころりよ」のことであるが、自分の知っている言葉で楽しそうに歌いながら部屋の中を歩きまわっていたものです。

道が二歳半のとき真が生れ、私が真を背に子守り歌をうたいながら家事をしている姿に出あう日が多くなると、何時か彼女も赤いボンネットに赤いドレスを着た布製の人形を背に紐でしっかりとおぶわせてもらって母親と同じ仕種で歌ったり人形と話すようになった。

私たちが子どもの頃のおもちゃは、殆んど親や兄姉の手造りであった。人形もその中のひとつで、長方形の座布団に頭をつけただけのようなもので、角には紅糸で房が綴じつけられて手になり足になっている。手の部分を肩のところから折りまげて、自分の着物を着せかえては遊んだものである。

いま私が幼稚園で見かける人形と子どもたちの生活は昔と少し違ってきているように思われる。畳に座る生活は椅子に変わり、寝ることはベッドが多くなった。赤ちゃんは抱かれるか車で連れ歩かれ、しっかりと紐で母親に背負われる姿などあまり見かけない。四辺の生活様式が子どもの遊びを変化させてゆくことは考えられるが、人形あそびの心までは変わっていないと思う。抱きかかえることによって、又紐で背

に負うその触れる部分をとおして、脈々と流れてくる母親の愛情を感じさせる大切な媒体であると思う。

人形と遊んでいる子どもの姿は、母親そのものであって、思い、しぐさ、扱かい方などあらゆる自分の身の廻りにおこるすべての状態と一緒に、彼等自身がこのようにされたいとか、したいと思う願望まで含められた世界を、美しく無邪気に表現して、現実と夢を織りまぜて見せてくれる。

しかしこれらは大人の見方、考え方であって、人形と遊んでいる子どもたちは理屈ぬきで実に楽しんでいる。そこには真実のことか、ほんとうのことが山盛りいっぱいあるから……。

＊

幼稚園の朝十時頃のままごと遊び、女児が三、四人ドレスアップして腕にはハンドバッグをさげ、外出するところらしい。

M子「さあ、おでかけしますよ、Yちゃん、Nちゃん」

N・Y「はあい！　あっ、あかちゃんどうする？」

M子「いいの、そのこおねつだから……」

布団の中に縫いぐるみの人形をねかして外出する。しばらくして男児の医者を一人つれて帰ってくる。

M子「せんせい、このこですけど、ゆうべたかいねつでした。みてください」

S男「おねつなら、ちゅうしゃしておきます」

注射器を取り出し、掛布団をあける。人形の手に荒々しく注射器をおしつける。取りかこんで見ていた女の子たちは、一斉にしかめ顔になる。皆で人形をのぞきこみながら、

皆「よち、よち、ほらもうおわり、いたくなかったでちょ」

あんなに痛そうに顔をしかめ、泣き出しそうにしていた子どもたちが注射が終ると、ふと吐息のような熱い息をはいてほっとした表情にかえっていった。

かたつけの時の一幕もちょっと、男児二人でほうるようにしてかたつけていた動物の縫いぐるみ、ちょうど来あわせた教師が、そっと抱きあげてほこりをはらい机の上にねかせる。一人言のように「いたそう!!」

彼等も同じように、ふーふーとほこりをはたいて机の上にのせ、動物たちに、

男児「おい！　そこでまってろよ、あとでうちにつれてってやるぞ！」

このように一見、粗野であらあらしい言葉や動作であるが、彼等もまた人形とのふれあいの中で、自分自身を見いだしてゆくのだと思う。

（武蔵野相愛幼稚園）

人形物語さまざま

矢川澄子

人形と人間とはどこがどうちがうのだろう。わたしの好きなメルヘンやファンタジーから思いつくままにいくつかの例をあげてみよう。

まずイギリス十九世紀のメアリ・ド・モーガンに『おもちゃの王女様』という童話がある。

むかしひとりの王女があった。そこはまことにお上品な宮廷で、あらゆる人間的な感情の素直な表白は失礼とみなされ、他国生れの王妃などはその息苦しさにとうとう病気になって死んでしまったほどだ。王妃の代母にあたる仙女は、のこされた幼い王女が日に日に生気を失ってゆくさまを見るにしのびず、魔法使にたのんで王女そっくりの年恰好の精巧な自動人形をつくらせる。なにしろこの宮廷で子供が口にすることばは、はい、いいえ、どうぞぐらいで、あとはすべて機械的動作で事足りるのだ。この人形を替玉に、仙女はひそかに王女をさらってきて海辺の漁師小屋にあずける。王女はここでばら色の頬を取戻し、のびのびと育ち、やがて年頃になって漁師の息子と恋しあうようになる。

一方宮廷人たちは仙女から事の真相を知らされても、自然児に還った王女をついに受容れられず、そのまま替玉の人形に仕えつづける、ということでこの話は終っている。いかにもヴィクトリア朝人の思いつきらしい皮肉な筋立ての一篇である。

＊

人形と人間との役割交換をさらに奇抜なかたちで童話に仕立てたものに、リチャード・ヒューズの『ガートルードとその子』がある。

木製人形のガートルードは、持主の子供があんまり手荒なのに腹をたてて家出して、森の中をさまようちに、ふしぎな老人に出会って「子供屋」につれてゆかれ

る。そこはまるでお人形みたいに子供をならべて売っていて、人形たちがよりどり見どり買ってゆくのだ。ガートルードもそこで自分の気に入った女の子を買ってきていっしょに暮らしはじめ、髪の毛を切ったり、水風呂で風邪をひかせたり、かつて自分が打けたとおなじような仕打をその子に報いる。でもそのうち人形たちのひらいたお茶会で、つれてこられた子供たちが犬におそわれ、ガートルードは危険をおかしてわが子を救いだす。ここではじめて人形と女の子とは仲よく抱擁しあい、女の子はガートルードの木の腕を人間みたいにあたたかいと思い、またガートルードは女の子の腕を木のようにたのもしいと思ったという。

＊

『人形の家』といっても、これはノラの話ではない。ルーマー・ゴッデンの方だ。現存のファンタジー作家で最も味わいのある人形物を書いているのはやはりこのひとであろう。

ゴッデンの人形たちはみな魂をもちながら木石の身をもてあましている。いわば物いわぬ人たち、肢体不自由児なのだ。

人形たちにとって人間は神さまだ。神さまがねがいをききとどけてくださらないかぎり、自分ひとりでは何もできないのだから。何かしたいと思ったときには人形たちはおねがいをする。無言で、懸命で、木の体、ガラスの体がみしみしいってひびわれそうになるまでねがうのである。このねがいがどこまで通じるだろうか。死ぬも生きるも、すべては持主である子供たちの心ひとつなのだ。

＊

ほとけ作って魂入れず、などという。仏像も人形もその意味ではおなじであろう。いまではすたれてしまった風景だけれど、そういえばむかしよくお人形代りに座蒲団を二つ折りにしておんぶした女の子を見かけたものだった。

女の子の人形あそびをばかにしてはいけない。二つ折の座蒲団にまで感情移入して母心をふりまけるなんて、とてもすばらしいことではなかろうか。

人間には自分より大きなものにあこがれ、惹かれる気持と同時に、自分より小さなものを顧りみ、いとおしむ気持がはじめから具わっているはずである。とりわけやがて母となり、小さな生命をはぐくむはずの女の子にその傾向がつよいのは当然であろう。そのあたりのことをよく見きわめた上で、わたしもいつかわたしなりの『人形の家』物語を書けたら、などと思っている。

"DOLL"

上村陽子

「まあ、日本人形みたいな可愛らしいお嬢ちゃんですこと！」

前髪を眉の上で真一文字に切り揃えた、人より濃い私のおかっぱ頭を撫でながら、客人たちは笑いかけた。少し照れてはにかんだような表情をつくりながら、私も強ばった頬を少しずつ和らげた。この大人の見え透いたお世辞が、まだ小さい私の胸にどんなに心地よく響いたことか。

お人形さんのように可愛い、人形のように可憐であることが、少女時代の娘にとって、どれほど素晴らしい憧れであるだろうか。

青い目の人形。私の憧れは、断然、西洋人形だった。金髪の巻き毛、雪のように白い肌、桜ん坊のような唇……こんな言葉が男の口から飛び出したら、何とも気障で、耳を覆いたくなるが、これらの形容どおりなのが人形なのだ。少女たちが、羨望の目で眺めるのも、無理はないだろう。

あっという間に、少女たちは、自分自身を目の前の人形そっくりの少女に仕立てあげてしまう。少女の空想は際限なく広がっていく。そう、私は、高い塔に閉じ込められたお姫様。誰か助けて。悲しい身の上のお姫様にされた人形は、少女作詩作曲の淋しさを訴える歌を、切切と歌いあげる。

また、ある時は、継母や我儘な姉に苛められる心の優しい女の子かもしれないし、悪い魔女に呪いをかけられて、深い深い森の中に眠り続ける眠り姫かもしれない。

しかし、御安心あれ。少女の物語の中には、その不幸な女性を救うべく、白馬に跨

った、凜凜しい王子様が登場する。人形は、忽ち、王子様に恋い焦がれる。咲き誇る薔薇のような幸せな乙女になる。

毎日のように、最後はいつも人形に白いウェディングドレスを着せて、私の人形遊びはおしまいになるのだった。あの頃の私は、清純、無垢な花嫁衣裳を着る日を夢に見て、将来何になりたいかと問われれば、即座にお嫁さんなどと答える女の子だったのかしら、とふと苦笑が浮かんでくる。

今の女の子たちも、私のしたような人形遊び、しているのだろうか。マスコミの影響が多大な日々、と言うより、マスコミに翻弄されているような毎日、整形美人としか言いようのない人形が氾濫し、最近に至っては、歌手や慢画の主人公の人形ものさばっている。さらに、私にとって、言葉を喋る人形や、歩く人形なんて、愚の骨頂であり、無抵抗の人形に余計な手を加えた人間に対して、舌を出してやりたいくらいだ。全く、なんでそんな小細工を施すのか、さっぱり判らない。こういう現在の環境を思うと、今の女の子たち、少し気の毒な気がする。

少し話がそれてしまったが、それにしても私の持っている人形たち、長い月日、何の不平も言わず、私の命じたとおりの役をこなしてくれた。

生まれてはじめて自分のものとなった人形。いつも和服姿の伯母から貰った、頬や手足のふっくらした人形。待ちに待った誕生日、両親にはやくからねだって、やっと手にした、姉妹の人形。どれも捨て難く、まだちゃんと我家に暮している。

不思議なもので、それらの人形とは、気を許した恋人のように真直ぐ向き合っただけでとても落ち着く気がする。肌の一部になってしまったような気安さがある。最近、洒落た店のショウウィンドウに、アンティックなフランス人形が、所狭しと飾られていたりするが、彼女たちとはそうはいかない。

「はじめまして。御機嫌いかが？」

「ええ、どうも有難う。今日は良いお天気で何よりですわ」

お互いの心が計り知れず、警戒しながら、そんな他人行儀な挨拶を繰り返すだけ。確かに、あなたたちはとても素敵だけど。私は、言葉をつまらせてしまうのである。

もう、何年も前から、人形を人から戴いたり、買ったりすることもない。二十歳をとうに過ぎた私が、毎日人形を相手に遊んでいるとしたら、薄気味悪いだろう。ごくたまに、ふと顔を見たくなるくらいのものだから、御心配なく。

只、させられたままの姿勢をとり続け、何の抵抗もせず、顔色一つ変えず、嫌な表情など決して見せないで、私と向き合ってくれる人形を、無性にいじらしくいとしく思うのだ。

（ゆかり文化幼稚園）

〝ふれる〟厳しさ

竹田扇之助

昭和四十七年春・竹田人形座は、西独ボッフム市で開かれた、国際人形劇祭に招聘され、出演する光栄を得ました。

はじめての外国公演で、折衝・連絡の手落なども有り、出演プログラムは、すべて大人を対象として組み、ドイツに参りました。

出演の当日、開演前に舞台袖より、客席を見て驚きました。会場は幼稚園から、中学生位の年齢の子で一杯になって居ります。瞬間頭の中がくらくらっとしてしまいました。

日本では浄瑠璃の芝居など上演しようものなら、時によっては、大人のお客様でさえ、あくびの出ようと云うのが現状です。ましてや子供に見せる等、考えることも出来ません。

事情はどうであれ、外に演目も無し、いまさら変更など出来るわけがなく、おそるおそる幕をあけて驚きました。

芝居がすすむにしたがい、客席は熱気をおび、実に堂に入った、間、タイミングで拍手が参ります。又心から笑ってくれます。もっと驚く事には〈ジワ〉迄子供達が起すことでした。

〈ジワ〉御存知と思ひますが、芝居用語で、感動した観客の心のときめきが、波の如く、潮の流れの様に、舞台の演者の胸に押寄せるさまをさして、いいます。

幕が開き、空舞台に、これからはじまるお芝居の情景を伝える、〈置唄（オキウタ）〉が流れて参ります。演じるものにとって、この置唄の出を待つ間に、今日の観客の質がわかる

ものです、ところが子供達が置唄の間に、すっかり酔わせてくれる、何んともよい気分で、舞台に入れるのです。

芝居も面白くなるわけです。結局見ているお客様全体が楽しくなる、いうところの、見巧者です。

最後の幕が降りますと、すごいアンコール、お互いに言葉は通じませんが、遠い日本から来てくれて本当にありがとう、楽しかったですよと、目と目、心と心で伝えてくれます。お礼のいいたいのは、こちらの方、日本人の創り伝えた、芝居をこんなに嬉び楽しんでいただき、私共に生きるよろこびをあたえて下さりましたと、舞台と客席の間に何んとも云えぬ、人間の生きるよろこびと申しましょうか、美しい心の交流の中に、とっぷりとひたることが出来ました。

あまりの素晴らしさに、この街の子供は、何か特別の指導・教育を受けているのであろうと思いました。ところが、翌日から、ボン市を中心に南から北迄、十二の大都市での公演を続けました。昼の部は皆子供、反応も全く同じなのです。

公演旅行も終り、西独人形劇研究所長・オルテルマン氏と、この事に付き話し合いました。氏は一言、ドイツの子供は、ちいさい時から本物の音楽をあたえ、本物を見せて育てます、ですから目・耳・肌から本物か偽物かを見わける力がつくのです。舞台の芸術は、台詞の内容がはっきりわからなければ、感動出来ないような舞台では、偽物と言われても仕方がありません、とこともなげに話されました。

この研究所に、日本から多くの幼稚園の先生方をお連れして、〈小さな虎〉と云う人形劇を見学したことがありました。

見終った先生方が、ドイツ語のわからぬ私達大人が、こんなに楽しめる芝居を見られるとは、ドイツの子供は何んと幸せなんだろうと感激していられました。

この劇団は、ドイツの幼稚園を公演している、三人の座員からなる手遣ひの型式でした。

間口二米位の枠の中にくりひろげられる芝居は、小道具一つの出し入れ、照明の転換、台詞のイントネーション、みな音楽の如き美しい流れで、細かく行きとどいた神経と、訓練を積み重ね磨きあげられた珠玉の舞台に、感嘆しました。

イタリヤ、ペリージアのモンテッソーリーセンター〈子供の家〉を訪問した折、アントワネット・パオリーニ校長が、幼児のさわる道具から、本物の感触を与えねばなりませんと云われ、心のくばられた園内を案内して下さりました。日本の芸の修業も同じだなと、感動したことが昨日のことのように思われます。

（竹田人形座）

ルソーの夢
――むすんでひらいて考――（その七）

海老沢敏

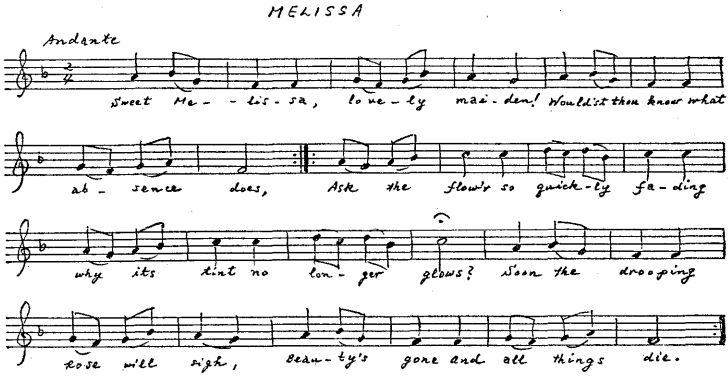
六、《メリッサ》と《ルソーの新ロマンス》

すでにくりかえし触れているように、《グローヴ音楽辞典》の初版ならびに第二版には、《ルソーの夢》の旋律が〈四半世紀前に（まことにわずかな変化を伴なって）〉見出されると指摘されている。ほかならぬ《メリッサ(Melissa)》なる歌曲である。これはすでに第四章でも《大英博物館印刷譜所蔵目録・一四八七年――一八〇〇年》に収載されていることを述べたものであるが、譜例①のような英語による歌曲である。

ハープないしピアノの伴奏によって歌われるこの歌曲の歌詞はチャールズ・ジェイムズのものであるが、以下のような内容をもっている。

いとしのメリッサ、美わしの乙女よ！
君なしですごすのがどんなことかわかるだろうか、
こんなにすばやく萎んでいく花にきくがいい、
なぜその色がはや輝やきを失なうかを？
やがて萎れゆくバラは溜息をつくだろう、
美わしい人は去り、すべてが死んでいくと。

▼譜　例①

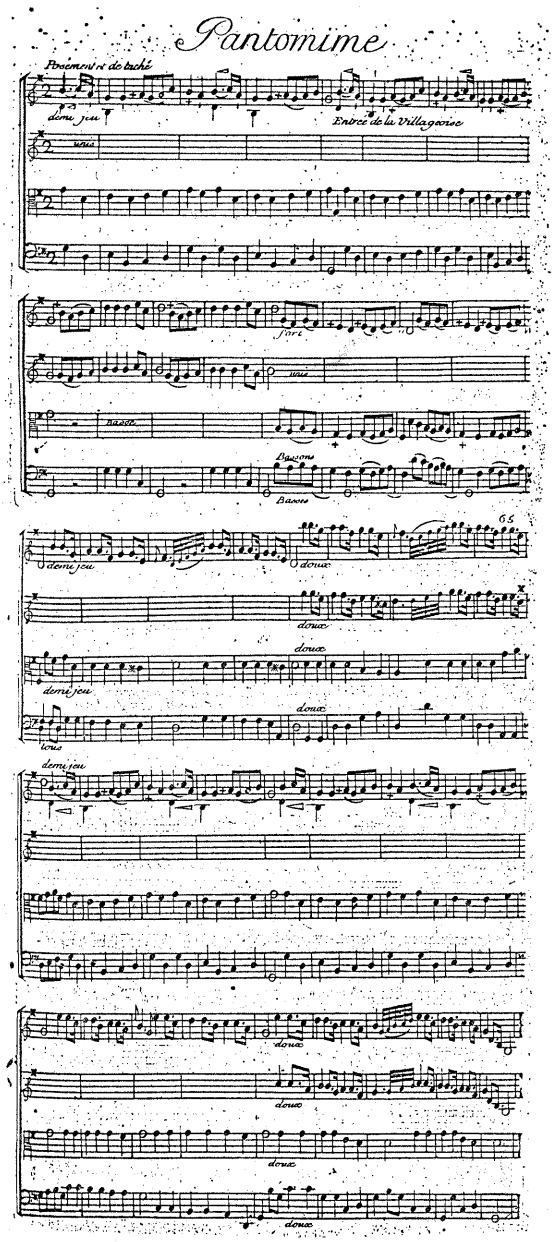


バラも大空もしとどの涙をしたたらせずとも、
美わしの人去りしを嘆き、
かのひとの不在をいたく悩む、
若者が独り身にやつれるように、
彼は秘めた苦しみを感じ
嘆きながら、しかもなおその謂れを秘している。

愛するひとが去っていった悲しみや苦しみを歌うこの歌曲は、アンダンテ、ヘ長調、四分の二拍子をとり、いずれも反復される前節八小節、後節十六小節の二部からなり、形式的には第一部の旋律が、第二部後半で再現するA—B—Aの三部形式をとっている。

この歌曲について、《大英博物館印刷譜所蔵目録》では〈〔ルソーの夢の節に合せて〕〉と説明を加えており、また、《グローヴ音楽辞典》も《ルソーの夢》の〈わずかな変化を伴なっ〉た形を考えている。グローヴ自身はこの歌曲とルソーの《村の占師》中の旋律との関係を指摘していないが、第二版では、この歌曲の旋律が、このオペラの第八場の《パントミム》に出てくるものであると述べている。《村の占師》の黙劇による劇中劇の音楽、いわゆる《パントミム》の冒頭に出現するこの旋律は、すでに第四章の

▼譜　例②



譜例③で紹介したが、一七五二年に作曲され、初演されたルソーのこの代表作オペラの版刻譜の初版にふくまれた原形を譜例②で紹介しておこう。この《パントミム》はルソー自身《告白》の第八巻で述べているように、一七五二年十月十八日のフォンテーヌブロー宮でのルイ十五世御前演奏による初演時には書かれておらず、翌一七五三年三月一日、パリのオペラ座での公開初演までのあいだに作曲されたものであった。

ルソーの《村の占師》は、のちに十二歳の少年モーツァルトの愛くるしいジングシュピール《バスティアンとバスティエンヌ》（K五〇＝K^6四六b）のモデルとなった牧歌劇であり、この一幕物のオペラ、あるいは幕間劇自体、その構想、様式などオペラ史上、きわめてユニークな作品である。そのようにオペラに含まれ

た《パントミム》もまたルソーのユニークな着想であった。従来のオペラでは、劇中にはなやかできらびやかなバレーがつきものであったが、ルソーはそうしたものにかえて、この黙劇を考案したのだ。この黙劇の女主人公の村娘がまず登場してくる冒頭で、この旋律がオーケストラによって奏されるのである。曲は〈急がずにはっきりと〉と指示されたト長調、二分の二拍子のもので、形式の点からはA—A—B—C—D—D—A—A—D—Dといった四小節単位の構成を見せている。

これに対して《メリッサ》はどのような関係にあるのだろうか？　形式上は原曲のAの部分（四小節）で八小節の第一部を構成させ、そのあとBをいくぶん変化させて第二部の前半を形づくり（B）、フェルマータで結んだ上で、Aを再現させるというすでに述べたA—B—Aの三部形式である。周知のようにいわゆる〈歌謡形式〉と呼ばれるものである。

さて、《メリッサ》は《大英博物館所蔵目録》では〈一七八八年？〉と出版年代が推定されている。この歌曲のタイトルの下に〈J・デイルのために印刷〉とあり、かつ〈ハノーヴァー・スクエア向いのオックスフォード・ストリートの楽譜店〉と記されていることから、この楽譜がロンドンの著名な楽譜・楽器商ジョゼフ・デイル（一七五〇—一八二一）の出版になるものであること、そしてこのデイルがオックスフォード・ストリート一三二番地に店を出したのが一七八六年であることから、〈一七八八年？〉という推定が根拠のあることがわかるのである。

ルソーの《村の占師》に収められた器楽曲の旋律が、このように英国でいつしか恋人の不在を悲しみ嘆く一曲の歌曲に変身しているのが見出されたわけであるが、どのようにして、こうしたかたちでの移入がおこなわれたものであろうか？　第四章で紹介したように、《グローヴ》第二版におけるフラッドの説明では、この旋律の英国への導入は、バーニー博士による《村の占師》の翻案紹介（アダプテーション）によるものとなっている。

チャールズ・バーニー（一七二六—一八一四）の名は、現在でも西洋音楽史の研究家にはひろく知られている。十八世紀の英国が誇る音楽家であり、作曲家、演奏家としても活躍したが、とりわけ音楽史研究家として名高く、彼の《音楽通史》〈全四巻、一七七六—一七八九〉はこの世紀の代表的な音楽史書である。彼はこの著書を執筆するための研究旅行を企てており、その体験が二篇の《音楽紀行》（一七七一—一七七三）に結実しているが、イタリア旅行の帰途、パリはプラトリエール街（グルネル街）のルソーの住居を訪れ、この思想家にして音楽家と親しく歓談の時をすごしている。一七七〇年十二月十四日のことである。ルソーと

THE
Comic Tunes in Le Devin du Village
OR
CUNNING MAN
Performed at the THEATRE ROYAL in Drury Lane.
Composed by
J. J. ROUSSEAU Price 1.6
For the Harpsichord, Violin, German-Flute, or Hoboy.
LONDON, Printed for H:BREMNER, Opposite Somerset House in the Strand.

▲図　版①

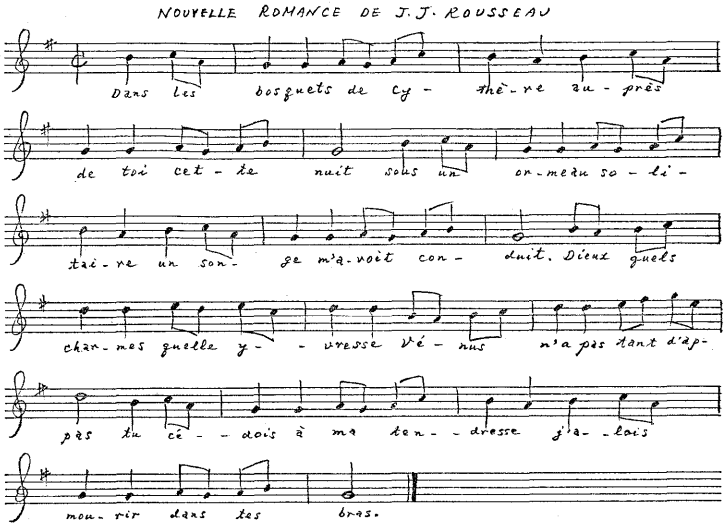
バーニーはおたがいに共感的な感情を抱いたらしいが、こうした直接の出会いに先立って、バーニーは一七六六年十一月二十一日に、ロンドンの有名な劇場、ドゥルリー・レインで、ルソーの《村の占師》を英語に翻訳し、《賢い男》（ザ・カニング・マン）（The Cunning Man）というタイトルで、英国民に紹介するという労をとっている。この翻訳（図版①）で、バーニーは原作が一幕八場であったのを二幕（第一幕五場、第二幕四場）に分けたり、登場人物の名前を変えたり、ルソーのレンタティク（叙唱）をカットしたりなどの変更のほか、出演歌手のために曲を追加するなどの工夫をこらしている。

しかしながら、ロンドンの音楽出版社ブレムナーから刊行された楽譜でみる限り、アリアはかなり忠実な形を保っているものである。この点《パントミム》も同様で、その冒頭の旋律も調号、拍子はもとより、旋律線にはなんら変更が加えられていない。

この飜案がロンドンで上演されたころ、奇しくもルソーは英国を訪れ、ちょうどダービーの近くにあるウットンに滞在していたのであった。デーヴィッド・ヒュームの招きによるものであり、やがて烈しい仲たがいが二人の思想家を分けへだてるのは周知のことであろう。このようにルソーは英国にいながら、自作の英国初演には立ち会っていない。しかしながら、当時英国の著名な歌手たち（トーマス・アーン夫人、ジョゼフ・ヴァーノン、それにチャンプニス）を配した《賢い男》は、翌日の十一月二十二日に再演されたあと、年内に八回もの上演がくりかえされ、さらに翌一七六七年三月まで舞台にかけられるのである。英国でも、このオペラがかなりの評判を獲ち得たことはたしかである。

《村の占師》が、英国でもかなりポピュラーな作品となったこと

▼譜　例③



は、一七六四年以前におなじく英国の音楽出版者ジョン・コックスが《ルソー氏作曲のオペラ〈村の占師〉の愛好歌曲》なる楽譜を原語（フランス語）で出版していることからも推察される。《パントミム》がそのままのかたちで英国で印刷されたのはこのバーニーの飜案である以上、《ルソーの夢》のかたちでなく、《メリッサ》の旋律形という意味でなら、《グローヴ音楽辞典》の説明はけっして誤まりとはいえないであろう。

だが、この《メリッサ》に先立って、同じような試みが、すなわち《パントミム》から歌曲を作る試みが、フランスでもおこなわれているのである。それは、すでに第四章で紹介した《大英博物館所蔵目録》のエントリーにみられる〈新ロマンス〉のことである。これは正確には《J・J・ルソーの新ロマンス（Nouvelle Romance de J.J. Rousseau）》と題され、〈キュテラ島の森の茂みで（Dans Les Bosquets de Cythère）〉という歌い出しをもっている（譜例③）。以下、その歌詞を訳出してみよう。

キュテラ島の森の茂みで
今宵、君のかたわらに
一本楡の樹の下に
夢が私を導いてくれた。

ああ！　なんと美しく、なんとうっとりとすることだろう、
ヴィーナスにもこんな魅力はない。
君は私の愛に敗れ、
私は君が腕の中に倒れ伏した。
でも見張りを絶やさぬ愛の神は、
私の幸福にねたみを抱いて、
幻は去り、私は目覚める。
君はもう私の心にしかいない、
すべては私の夢とともに光を失ない、
そして、ああ、なにひとつ残りはしない、
このいとしい幻のうち、
私の恋の焔と君の美しさのほかは。

ああ、私の無上のよろこびである君よ、
この日、君の正当な権利を行使して
私を憐れんでくれて、
愛の神を君に服従させ、
私の心からの烈しい愛を鎮め、
私の恍惚とした心に、
空想のひと夜、
真実の時を与えておくれ。

このテキストは、幸福の島で、夢を夢み、愛するひとをかきいだくが、愛の神の嫉妬がその夢を打ちこわしたあとの絶望のうちに、愛するものに切に願い事をする恋人の気持を歌っている。

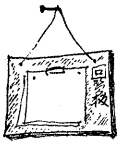
この歌詞がつけられた音楽は、もちろん《パントミム》冒頭の旋律に由来するもので、ト長調、二分の二拍子をとり、A--A--B--Aという形式をもっている。《大英博物館所蔵目録》によれば、この楽譜の出版は〈〔パリ、一七七五年？〕〉となっている。この年代の推定の根拠は明らかでないが、これはなおルソーが存命中のことであり、当時ルソーは長かった追放・流浪の不安定な旅の生活を終え、パリのプラトリエール街（グルネル街、現在のジャン・ジャック・ルソー街）の家に閉じこもって、静かな生活の日々を送っていた時期のことである。

それではこの《新ロマンス――キュテラ島の森の茂みで》は、ルソー自身とはどのようなつながりをもっているものであろうか？　そして、この歌曲の歌詞と旋律、曲全体が、《メリッサ》ともども、どのような意味と性格をもち、またどのような役割を示すことになるのであろうか？

（つづく）

（国立音楽大学）

私の幼児教育論（二）



佐々木　正美

父親

児童精神科の診察室や地域療育機関の相談室で、毎週大勢の子どもやその家族の人たちと会っていて痛感することは、そういうところに連れて来られる子どもの多くが、親に対して十分な依存体験をする以前に、すなわちまず子どもの側の欲求が十分に満たされる以前に、親の側のいわば一方的な要求や期待をおしつけられているということである。

親とすれば、子どもを大変可愛く思い、その将来を真剣に考えてやっているからだということになるのだが、私の目からすると、子どもの将来を「思いやっている」というよりも、「心配している」というふうに見えてしかたがない。

不幸にして先天的に心身障害をもって生まれて来た子どもの将来を、親が「心配する」のならば、よく理解ができるが、健常な状態で生まれてきた子どもに対して、いきなりその子どもの将来を心配しているように思えてしかたがないのである。

子どもの将来を心配する傾向は母親に強い。そして、そういう母子関係の場合の父親は、子どもの躾や教育をすっかり母親にまかせきりにしている。本来、まかせるというのは、相手を本当に信頼して何かを託すことなのだが、そういう場合の父親は、母親の育児や教育に必ずしも信頼しているというのではなくて、つい億劫だからということで手を出さないでいるか逃げている。

父親が子どもの躾や教育に積極的な姿勢を示してくれないと、母親に十分な自主的判断力が育っている場合であればいいのだが、子どもの父親である夫に多くの依存心をもっていて、主体的な価値観をもち合わせていない状態でいると、母親自身が依存の対象を見失ったままで、潜在的な不安をうまく処理できず、ゆとりのない緊張した母子関係を持続して、過保護でむやみと干渉の多い育児をしてしまう。

子どもの側では、自分の要求が受容されるよりは、母親のゆとりのない一方的な要求をおしつけられて、干渉の過剰な養育をされ続けることになり、慢性的な欲求不満に陥ったきりになっている。以前のように第一反抗期とか第二反抗期だとか呼ばれるような、いわば発達の節目がなくなって、幼児期のはじめからずっと欲求不満の連続で、慢性的な反抗期を示したり、かと思うと母親の一方的な要求に屈服して、母親の機嫌がよくなることに自分の心の安らぎを感じたりする子どもが多い。いずれにしても、子どもは本当の自主性や自立心を育てそこなってしまう。

今日のように、社会の中の価値観が多様化し混乱さえしている状況で、人々にそれぞれの責任感への意識が乏しく、権利意識の方が優先しがちな戦後民主主義ないし自由主義の風潮のために、人々は何か共通の利益関係ででも結ばれない限り連帯しにくく、相互に孤立したままの生活を余儀なくされている現状であればあるほど、子どもの養育に関する父親の役割りは重要になると思われる。

今日は情報過多の時代だといわれる。そのことは情報を欲求している人や情報に左右されやすい人が多いということを意味する。すなわち主体性の乏しい人が多いということである。

家庭の中に精神的な支柱を立てるのは、父親の役割に帰するところが多いと思う。そのことは、母親が自主的な育児をしやすくすることを意味し、子どもに自主性が培われることを意味している。

私は、子どもたちが幼児期の一時期、将来大きくなったら自分の父親のようになりたいと思うことがあるといいと思っている。そのことが理想だとさえ考えている。

父親は何でも知っている。少くとも幼児期の子どもにはそう思える時期がある。「猫はどうして子どもにもお母さんにもひげが生えているの？」式のやたらに多い「どうして？」の質問にも答えてくれる。母親の買ってくれない大きな玩具を、誕生日などに買ってきてくれるのも父親である。大事なことだとすぐ母親は「お父さんと相談してから」と言うし、いたずらの度が過ぎると「お父さんに言いつけて叱ってもらうから」とも言う。母親の持てない大きな重い物を、父親は軽々と持ち上げて運んでしまう。近所でちょっとしたいざこざが持ちあがると、父親が出かけて行って話し合いをして、かたをつけてくる。父親の休日には、ふだん母親とだけでは行きつけない遊園地や海や山へ連れて行ってもらえる。子どもの幼稚園のことも、母親は父親に相談にのってもらってきめている。平常はあまり子どもの行動に口出しはしないが、何かの時には厳しく叱られて、どこかに怖いところのある父

親。そんな父親を、母親はたしかに信頼しているらしい。

私は、幼児期の子どもが、このようなごく平凡で平均的な父親像を漠然とでいいから抱いてくれればよいと思っている。そしてたったこれだけのことではあるが、それなりに父親は努力が必要であるとも思っている。

そのなかでも、特に私が幼児期の子どもの養育で心がけたいと思っていることに、二つのことがある。その一つは、子どもの「どうして?」という質問に対して、できるだけていねいに答えてやろうということである。「カブト虫の足はどうして六本あるの?」とか、「夏はどうして暑くて、冬はどうして寒いの?」といったような疑問に対して、相手に理解が可能な答えかたをすることは容易でないことも多いが、そこに子どもを育てる妙味がある。自分で物を考える子ども、すなわち知的好奇心の豊かな子どもに育てるために、不可欠な対話のしかただと思っている。

そして、こういう対話は、できるだけ自然の教材や現象を媒介として行うのがよいとも思っている。そのためもあって、私のところでは犬をはじめ、亀、やどかり、ざりがに、金魚その他の雑魚、かぶと虫やくわがた虫などの昆虫、その他安価な生きものばかりだが、沢山飼っている。ところがこの一年間に、これらの犬、くわがた虫、ざりがにが、それぞれ子どもを生んだのである。こういう出来事は、それらを一緒に飼育している親子の関係を、うんと親密にするし、子どもたちに「どうして?」の類の質問を著しく多くし、図鑑などへの書物への関心を急速に飛躍的に深めることになる。

子どもたちは、自分で見たり観察して、図鑑やその他の本で自分でたしかめて、自分で父親や母親にも質問を発して、新しいことを知ることに、創造的な喜こびを見い出して行く。

二つめに心がけたいことは、できるだけ子どもと身体を動かして遊ぶことである。このことは、私がカナダのバンクーバーに児童精神医学の勉強に行っていた時、現地の先生や同僚たちの親子の生活に学んだことである。当地の父親たちは、日本の父親のように老けこんでいない。実に活気にあふれた調子で子どもと遊ぶ。母子の関係に比べて、父親と子どもの関係は時間が少ないが、実にエネルギッシュな関係が多いという印象を強くうけた。身体の動きは精神の活動そのものであると、彼らはよく表現した。幼児期から学童期にかけては、特にそのことがあてはまる。

私の家の周囲には、自転車で行ける距離に、自然を残した公園がいくつもあり、そのほかにも山林に人工的な手を加えたフィールド・アスレチックもある。小学校一年生と幼稚園の年少組の二人の息子には、それぞれ自転車を与えて、時には二歳になったば

かりの三男も連れて、ちょっとしたサイクリングをしながらよく公園に出かける。子ども用のサッカーボールやバットやグローブを持ったりして、まだとてもスポーツの恰好にはならない息子たちと、できるだけ公園や山林の中をかけまわることにしている。

身体がよく動くようになると、幼児期から学童期の子どもの精神機能も、生き生きとしてくる。それに自転車にのって、自分ひとりで動きまわれる行動半径が拡大してくると、子どもの自我成熟や社会性の発達が、急速に進展してくるのがよくわかる。

遊び

このようなことがらにも増して、私が幼児の教育に最も重要視することは、「遊び」の奨励である。このことはどれだけ強調しても強調しすぎることはないと、常に自分自身に言いきかせている。

毎週、私の診察室や相談室を訪ねてくる何十人という子どもたちの中には、勉強やお稽古事のよくできる子どもならいくらでもいるが、遊びの上手な子どもはおそらく皆無に近い。だから、幼児期から学童期の初めにかけての子どもが、毎日楽しく遊べていれば、情緒の発達や精神機能の基礎的な発達にはまず心配がないとさえ思われる。

子どもは放っておいても上手に遊ぶことができると、多くの人々は考えている。確かにそのとおりであるが、この当たりまえのことが当たりまえでなくなっているのが、今日の子どもを取りまく家庭的・社会的状況というべきなのだろう。

子どもは放っておけば遊ぶのだが、放っておいてもできるようなことは、あまり価値がないと考えるような風潮が、戦後の社会にはできあがってしまった。そのことは、異常に過熱した進学競争や受験戦争と無関係ではない。そしてその試験をする側が、子どもたちの遊びの中で培われる真の主体性や創造性をテストすることをしないで、安易な機能的記憶術を試すような知識を求めすぎたことも、子どもから遊びを奪うことに拍車をかけることになったと思う。

子どもが遊べなくなった原因は、まだほかにもある。人口の都市集中現象で、人の住むところはどこでも過密化してしまった。そのために子どもの遊び場としての広場がなくなってしまった。道路に自転車があふれて、裏通りまで安心して遊べる場ではなくなった。路地で石けりやゴムとびをするようなことはできなくなってしまった。それに遊び仲間も見つけにくくなってしまった。みんなお稽古事に行ったり、交通事故やその他の怪我などを心配

して、親が自分の目のとどかない戸外に子どもを出すことを嫌うようになったことや、家の中に十分な玩具があったり、テレビジョンがあったりして、戸外で仲間と遊ばなくても、退屈しないですむようになったからであろう。

けれども私は、子どもが自分ひとりで、あるいは兄弟たちとだけで、家の中のきまった出来合いの玩具で遊んでいても、それは子どもに真の創造性や想像力を育て、社会性や主体的な自我の成熟をうながすことには、ほとんど無力であろうと思う。

子どもたちは、親の目から解放されたところで、仲間たちと協力し合い、自然の地形や条件に創意や工夫をこらしながら遊んでこそ、本当に遊んだということになるのだと思う。子どもの遊びは暇つぶしではない。生命や生活そのものであり、発達や成長に不可欠なことであると同時に、将来、真に自主的で独創的な仕事をするための基礎となるはずである。

そのために親のなすべきことは、近所にできるだけ多くの同世代の仲間がいるところに居住することと、安心して遊ばせられる場所を見つけたり、つくってやったりすることであろう。

私は、子どもが四歳くらいになったら、少しずつ仲間たちと遊べるようにしてやりたいと思う。互いに独立し合った者どうしが、協調し合って遊びを創っていく。主体的な存在として、互いが衝突して、けんかに発展することもある。しかし、けんかの不快さを体験したものでなければ、けんかを避ける方法を学習することはできない。遊びの中で仲間たちが創造的に協調性を身につけていく。なかには仲間の中でリーダーシップを発揮するのもいるし、いつもだれかの後に従ってばかりいる子どももいるであろうが、それぞれがそれでよいと思う。社会性も主体的自我の発達も、こういう仲間との遊びをぬきにしては、あまり、期待できないと思う。

何人もの仲間や、親が目を離していても安心していられるような遊び場がない環境では、友だちの家に遊びに行ったり、親どうしが交代で子どもたちの遊びを見守るようにすればよいと思う。自分の親の目の届くところでしか生活や遊びをしない子どもは、子ども自身が遊びに意欲的・主体的に取り組みにくい。親自身の生活の目標が子どもに投映されすぎて、子どもは目的意識のない生活を繰り返すことに馴れてしまう。

密着しすぎた母子関係の弊害と、疎遠すぎる父子関係の弊害が、今日の児童の精神衛生に関する問題の主要な部分を占めている。

＝つづく＝

（小児療育相談センター
東京女子医科大学小児科）

私の保育

——幼児教育の反省——

金子房子

「私の保育」という題をいただいて執筆ということで、私はあらためて「私の保育」といえるものがあるだろうかとちょっとためらいを感じました。

思えば、三十年、一見、長い年月、保育にたずさわってまいりましたが、私にとってはことし、学校を卒業した新卒の気持で過してしまったようです。事実、一日として満足した保育が出来なかったのです。きっと、これからも同じ繰り返しではないかと思います。この機会に過ぎた日々を考えおこして自分の反省としてみたいと思います。

○新卒時代

私が学校を卒業した頃は、戦争直後で社会も落ちつかない時代でした。それでも私達は、倉橋先生の御言葉と及川先生の御指導を背に、胸をふくらませて現場に巣立ったものです。

しかし今日の先生方と違い幼稚園の先生になっても教えられるか心配で、指導などの意識はなかったようです。

教える、指導するためには、子どもたちに何らかの利益を及ぼさねばならない、それには私自身あまり未熟でそれだけの価値がないと思い、先生といわれることは私の中では将来の目標だった気がします。

そのかわり自分の全身全霊をつくして子どもたちに捧げよう、それが子どもたちにとって何らかの役に立ち、それが指導の出発点と考えました。

教えるためには、知識も広くもたなくてはと思い周囲の先

生方からすべてを貪慾に吸収しようとも考えました。

さて、職場に出て子どもの前に出たとき、きらきらと輝いている目で見られたとき私は思わず、震えがきたものです。何か私の心の奥まで見通されたように思えたものでした。

今でも自分が不用意に子どもたちの前に立ったときには同じような気持になります。

「せんせい、せんせい」と呼ばれる度、冷や汗をかいたものでした。

子どもと同じように遊びにまぜてもらっている中に、「せんせい」というのは名前として呼んでいるのに気づいたので安心したものでした。しかし、それでも自分を「先生」とは言えず「あたし」とか自分を指さしたりしたものでした。

勤務は何でもつらい仕事は率先してしようと心に決め、朝も一番に出勤し清掃、お茶入れ、日曜日にはピアノの練習にと幼稚園に通ったものです。

清掃をする場合でも「これはお子さんの使う机だから…」と思うと力が加わって、それが子どもたちへの愛情のひとつだと考えたりしてみました。

先輩の先生がピアノを弾かれると子どもたちは元気に大きな口をあけて楽しそうに歌を歌うのに、私がピアノを弾いても、がやがやと騒いで一人へり二人へり、とうとう誰もいなくなってしまったことが何回かありました。

子どもと同じように遊びすぎて他が見えず「後に目がない」と注意を受けたので螺旋に後を振り向き〳〵歩くようにしたため、目が廻ってしまったこともありました。

お弁当のときも、子どもたちの食べるのが早く、すぐに外に遊びに出ていってしまうので、ご飯を丸呑みにして食べたり等、時折、自分でもつまらない努力をしているのでは、と考えてみたりしたときもありました。思い起すと、まだまだ様々な、あまり効果的でない努力をしたように思いますが、それが今になって、教育実習生や新卒の先生に接する時、この経験は無駄でなかったことに気づきました。

○幼稚園の今昔

私も中年になりくどくなったのでしょうか老婆心が強くなったのでしょうか、幼い子どもたちのことを思うとき、生をうけて始めて接する人間は母親、次は幼稚園の先生ではないかと思います。

子どもの教育とは子どもの成長発達を促すような環境を人為的に作ってあげることで、教育の主体は子ども側にあるの

です。

幼い子どもたちは抵抗を示さず順応していくので幼稚園の先生の存在は重要であり、先生により子どもたちがどのような人間になるか決まってしまうのではないかと思います。

先日から、実習生が来て、子どもたちの前に立って保育する様子をみて驚きました。

態度は堂々たるものです。「先生〈〈」と自分のことを連発し、子どもを自分に従わせようとしています。言葉も粗雑で、すべて命令調です。

何事も上手に出来ないと、子どもの責任のように考えて自分の反省はないのです。幼稚園の先生になるのに少しも子どもと遊ばず、高い所から観察しているだけです。

子どもを一斉に集めてすべて言葉で子どもを号令のもとに動かすのです。これでは大学の先生と同じような教え方と思います。

幼い子どもを教えるということは、自分のからだを使って肌を通して、自分の子どもと同じように遊ぶことから子どもの心の動きを受けとめ、子どもの理解も深まるし、子どもの欲求や興味、関心をわかることになり、指導の前段階になると考えられます。

最近の幼稚園では先生にまつわる子どもの姿や、先生をぶったりする姿は、あまり見られなくなりました。

子どもにまつわられることがよい指導とは申しませんが、私が思うには、今の先生は子どもとの距離がありすぎて、子どもたちが先生に愛情を抱くまでに親近感をもち得ないのではないでしょうか。

子どもたちも利口になったのかもわかりませんが「おかあさんの次に先生が好き」これが幼児が始めて他人への人間関係の出発となると思います。

勿論、教師や親には、このような子どもに育てたいという人間像はあっても、相手の子どもを無視しての指導は効果があがらないのではないでしょうか。子どもの教育は、子どものためにするものであり、教師のためのものではないからです。

教師が満足感を得るためでは教育ではなく自己満足になってしまいます。子どもの欲求を正しく知り、よい方向にむけ、相手が満足するように教えたいものです。

時折、私は若い先生達にこんなことを話します。

「あるときは子守りに、あるときは友だちに、あるときはおかあさんに、仲間に、お姉さんに」と。その時々、相手や場

合で接し方を変えていけば指導も子どもに満足感を与えながら出来るように思います。

これも指導の方法の一つの助けになります。

教えるということは客観的な知識、技能、行動への構えといわれています。これを上手に組み合わせてこそ教えることになるのだと思います。

教師は職業であるといわれるようになり、今は知識や技能を重視し、性格行動はあまり教師に期待しない時代になって来たようですが、私は幼児教育は前述の行動の構えが中心であり、教える私共の人格ということが強く子どもたちに反映するようにと考えてます。

昔の幼稚園は、殆んど教材はありませんでした。ローソクのようなクレヨン、更紙のような絵本、画用紙、濁ったような色の折紙、それらもあればよい方でした。

教材のすべては、教師のアイディアにより作られた手作りのものばかりでした。ニカワを入れて新聞粘土を何日もかけて作ったり、古葉書で製作したり、それは教材準備に時間がかかり、その上あまり子どもたちの興味をそそることはできなかったような気がします。

それに比較して現在は教材の氾濫時代、教師が指導の助けに自由に教材を選びとり入れられ、アイディアも広く拡がりやすいように思いますが、それにしては、あまりにも教材そのものにたより過ぎたり、安易に教材を使いすぎているのではないでしょうか。

活動の内容もパターン化してきているように感じられます。物資が豊富になると人間は知恵を働かせたり、創造活動もなくなるのではないでしょうか。

こんなように書いていきますと昔の先生がよく、環境条件もよいように思われますが、おどおどした先生は、子どもにとり不安な気持をもたせたでしょう。

教師らしい先生には統率力と安定感があると思います。

数日前、子どもが私に「せんせい遊ぼう」と誘いに来てくれました。まだまだ子どもたちは私を仲間として認めてくれています。

私は、もし子どもたちから友達として仲間として扱ってもらえなくなった時、私は指導が出来なくなってしまうと思い、幼稚園の教師の資格がなくなったと考えたいと思うこの頃でございます。

幼稚園は子どもたちが楽しく、よろこんでくるところ、先生や友達と遊びその中から、いろいろな体験、経験を重ねて

いく、幼児は生活すべてが遊びであったが時代の要請によってでしょうか、ずい分社会の流れによって変ってきました。

テレビ時代には視聴覚教育が全盛でした。

カリキュラム、教育課程編成時代、体育的遊び、数量、図形の指導、思考力を育てる指導、ひとりひとりを大事にする指導、心を育てる指導、生き生きとした子どもを育てる指導、まだ細かいものを入れれば数限りなくありました。

私も時代につれ、流行の服を買うように、研究会に出席したり、本を読んだりと時代に遅れまいとしました。

学校時代に倉橋先生から受けた教えの数々が私の頭の中に強く焼きついていて、なかなか納得が出来ない内容のものもありました。

どれも大事な教育の一つと思いますし、どれ一つも欠けてはならないものと考えます。

子どもたちは昔も、今と同じように未分化で多くの可能性を秘めています。

私は、いつも壁につき当った時、倉橋先生の『育ての心』『幼稚園雑草』を読んで考えます。

小学校指導要領が改訂になり、その内容の柱は、倉橋先生の教えに近いように感じました。共に私は教えを受けて教育に職を奉じ幸福だと感じています。

現在は、主任というちょっと教師としては曖昧な立場で事務、雑務ばかりいたしてますが、これも間接的に子どもたちに役立つと思うと、喜びに変ります。

この頃では、子どもたちが「せんせい何のせんせい？」「おそうじ？　遊べないで可愛そう―」と声をかけられます。

担任の先生が気を使って「えらい先生よ」というと「わはは……」と笑います。

補教でいくと「ピアノ弾ける？　ここに紙入ってるよ」といろいろと教えてくれます。

「あら、こんなにむずかしいこと出来ない」というと「ばかだなあー。やってあげるよ」といいます。

相撲など一緒に遊ぶと、さあ大変、みんなで、からだの上に乗られてしまいます。私はこんなとき一番、幸福感にひたります。

もう私のように遊び友達になって、よい方向づけしながら指導するのは、古い教師なのでしょうか。

最近は、幼稚園教育用語も大変むずかしい言葉が使われるようになってきました。言葉のおさえや理解がはっきりして使うのならよいと思いますが、書いたり、言ったりして指導

した気分になる場合があるようです。

指導案の「ねらい」の言葉にしても立派すぎて、果してどの程度に理解され、おさえているのか疑問をいだきます。子どもの成長過程や欲求を考えて、もっと具体的に、こんなようにして、こんなようになってほしい、そのために教師はこのような援助をしようと考え、幾通りかの場面を想定してから、言葉を使ってほしいと願っています。

指導案に書くだけでは、子どもたちの指導はできません。子どもを無理にひっぱったり子どもに満足感を与えられないでしょう。

子どもの満足感や成功感が経験となり、成長ということになります。

指導とは、綿密な準備と用意と、タイミングが効果的な指導と思います。何年やっても満足できる指導が出来ないのは、時代や個々の子どもがいろいろであるからだと思います。

それでも私は常に教育は新鮮であるべきと考えております。

教師があまり教える意識が先行すると、どうしても子どもに意欲がなくなると思います。また教師はもっと子どもの心をひきつける魅力の持主であることが必要と思います。また、アイディアの持主であることが子どもの興味をそそります。アイディアは、教師の指導の技術や方法の助けとなります。これも特別に訓練しなくとも、日常の生活の中で、ものの見方、考え方を多角的にする姿勢で養われると思います。時間的に余裕のない人の勉強法でもあります。これは教材研究の一端ともなります。私共の生活をちょっと意識を変えてみてはどうでしょうか。

○おわりに

現在は、幼児教育が人間性の基礎となるということは、社会一般にもいわれるようになりました。

私共の指導している子どもたちは、次の社会を担う大切な人間であります。私はこの子どもたちに、限りない愛情をそそいでいきたいと願っています。幼稚園の教師も重要視されてきた時代ですから、その期待に答えて私は、健康で明るく、視野を広くし、私のすべての能力と経験を生かして、幼児教育に、残り少ない教職を悔いなくすごしたいと考えてます。

（東京・大田区立矢口幼稚園）

『復刻・幼児の教育』

〔趣旨〕

『幼児の教育』は、明治三十四年に『婦人と子ども』と題して創刊されて以来、わが国の保育の発展と歩みをともにしてきた。その後今日に至る七十余年の間に、この誌上で発表された記事や論説は、保育理論の先駆的な役割を果たし、わが国の幼児教育の発展に寄与するところ大であった。また、雑誌出版史上においても、現在まで継続する最古の月刊誌のひとつである。

本雑誌の戦前版は、月刊誌という性格上、また震災、戦災による焼失が相まって、今日では研究機関ですら、完全な揃いは皆無であり、研究者が容易に閲覧できない現状である。一昨昨年の幼児教育百年、今年の国際児童年と、幼児の問題に対する一般の関心は、著しい高まりをみせている。

この機会に、わが国の幼児教育の進歩の様相を目のあたりに概観する好個の原資料として、また先覚者たちの抱負と熱意の結晶する稀有な文献として、同誌戦前版を復刻刊行する。

〔体裁・内容〕

全二〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入、題字・東山魁夷、別冊記念論集

《一巻～二〇巻》『婦人と子ども』明治三十四年～大正九年

※わが国幼児保育の普及期

※一年分を一巻に合本。各巻平均六百頁

○表表紙から裏表紙まで、広告頁も含めて、完全に復刻する。
○色刷の表紙も、できる限り近い色で再現する。
○写真印刷上、出にくい文字部分の一部修正のほか、原則として原本に手を加えない。
○今回の復刻を第一期とし、時機をみて、残りの戦前版部分を第二期として刊行する。

《別巻》二八〇頁程度

・解題　〝『幼児の教育』戦前版について〟
・東基吉・倉橋惣三の関係論攻
・総目次　戦前版すべての目次を収録
・年表　幼児教育百年史

〔刊行〕　名著刊行会

〔予価〕　現金価格　一八〇、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕　総発売元・株式会社コーディック

東京事務所　東京都千代田区神田神保町一―四七　大森ビル
TEL　東京（〇三）二九四―三八六五

本　社　大阪市東区今橋二―二二　藤浪ビル
TEL　大阪（〇六）二二七―五三四一（代）

青い目の人形使節

有吉国子

今から約五十年前の昭和二年春、青い目の人形一万二千七百三十九体が、アメリカから親善使節として、日本に送られて来ました。夫々がパスポートとメッセージ、そして着がえの洋服まで持っており、メッセージには、その人形の名前と出身地、そして日本の嬢ちゃん坊ちゃん仲良くしましょうということばが書いてありました。はるばる太平洋を越えて船でやって来た人形たちは、雛祭りの日に東京の青年会館で盛大な歓迎式をうけた後、全国の小学校や幼稚園に配布され、夫々の地であたたかい歓迎をうけ児童たちの友達になりました。

この人形の第一陣が横浜の港についたとき、横浜の女の子達（多くは小学校の代表生徒）がみなきものの晴れ着姿で、船内から一つずつ人形をうけとり、市内をパレードして歓迎式場へ向いました。街中は日米の国旗をかざした群衆で満ちあふれました。当時五歳になる少し前の私もこの仲間に加わり、大事に人形を抱いて歩きました。小さい女の子たちですから隣にはそれぞれのお母さん達が並んで歩きました。私が最年少だったことはあとから聞きました。何しろ幼なかったので、実際の記憶としては、とても大きいお人形だったこと、はるばる海を渡ってきたお人形だから大事に持って歩きなさいと言われ、幼な心にも緊張してひたすら歩いたこと位しか覚えていません。ただ当時の新聞に大きく出た写真をみながらその後も大人から聞かされた話、大へんな歓迎行事だったということが頭に残り、よい記念としてその新聞を今日まで大切に保存していました。

さて、人形たちが全国各地でこども達とよき友となって十余年たった頃、太平洋戦争が勃発し、人形にとっても受難の日々が訪れてきました。直接空襲で焼かれたものはもちろん、敵性人形ということで無残にこわされ或は廃棄されたもの数知れず、一万二千余りの人形の殆んどが消え去ってしまいました。しかし、その厳しい状勢の

中でも、善意の人たちの手で大事にかくされ、保存され、五十年間生き続けた人形がみつかって来たのです。この生き残りの人形の存在に感動した有志が実行委員会をつくり、昭和五十三年の終戦記念日、八月十五日から一週間、東京新宿の三越で「青い目の人形展」を開いたのです。私も委員の一人になりました。既にみつかっていた十四、五体の他、或はさがし出し、或は新聞でこの企画を知って名乗り出たお人形が加わり、三十四体が展示され、うす汚れた衣裳ながら五十年ぶりの再会を喜び合うかのように三十四の笑顔がならびました。

その一つであるお茶の水女子大附属幼稚園のメリーさんを私がさがし出したのも奇しき縁というべきでしょう。親類の男の子が「お茶の水幼稚園では雛祭りになると古い西洋人形が飾られる」と話していたのを聞き、同幼稚園におたずねしましたところ、「最近古い先生方の集りで、この人形が昭和二年の親善使節とわかったところです。移転等でパスポートやメッセージは失われてしまいましたが」というご返事で、早速拝借にいきました。その昔は、園児さんたちと仲良く遊んだのでしょう。黄色い木綿のワンピースは色あせてうす汚れてしまいましたが、つやつやした顔も手足も損傷なく、無心な顔で笑っていました。

八月十五日に蓋明けした人形展は、まことに感動の展示会でした。ハンカチで涙をおさえながら場内を一巡される方、なつかしさにあふれる顔で人形をみつめる方、中年以上のこうした方々を中心に観客がひきも切らずで、多数の方が受付の私共に夫々の思い出のお人形さんの名前を言っては当時の話を夢中で話されるのです。それは出品された三十四体の人形はもちろん、消え去った何千体のお人形に思い出を持つ方々の五十年の風雪を越えた歴史の象徴でもあったのでしょう。日本国中のみんなが参加して一万二千余の人形を歓迎し、すべての児童が二銭ずつお金を拠出して返礼の日本人形五十八体をアメリカに送ったという、この親善の灯が、あの悪夢のような戦時中でさえ灯され続けていたというすばらしさを、私共は深い感動で味わいました。アメリカの世界児童親善協会から「世界の平和は子供から」という趣旨で、児童の身代りとして送られて来た人形は、五十年後の今も変らない友情を無心な笑顔で語りかけているのです。

一九七九年は国際児童年です。私共はこの人形使節のもつ意義を現代に生かして、人形を通じこどもを通じての世界平和友好に何らかの貢献をしたい、それが出来れば、失われた何千のお人形の鎮魂にも、又生き残ったお人形の慰労にもかなうのではないかと考えております。

お人形

南沢明子

私のタンスの中に今も眠っているアメリカ生れの眠り人形、随分古くなっています。これを見ていると幼い頃の思い出が小学校から幼稚園へとつらなって浮んでくるので捨てられないで大切にしまってあります。

小学校の三年生の時、盲腸炎で一か月入院した折、幼稚園の先生がお見舞にこの人形を持ってきて下さいました。

とてもうれしくて母が家に帰ったり買物に行ったりしている間、それはとても長く、淋しく感じたのですが、この人形によってどんなにかなぐさめられたことでしょう。

赤い髪の毛の青い美しい眼の眠り人形を寝かせたり抱いたりしながら、なかなか母が帰って来ないのでベッドの上で、人形と並んで眠ってしまったこともありました。

このお人形を下さった先生は、関屋先生と仰って眼鏡をかけた若い先生でした。

今でも、人形と折り重なって、先生と手をつないで遊んだ事を想い出します。

私の通った幼稚園は長野県の田舎にありましたので、通園の途中の田圃の畔道や桑畑で摘んで遊んだ草花や桑の実の思いと共に、成長していく私の心を温く育ててくれたように思っています。

＊

現在、私が勤めています幼稚園には、常時、ママごとコーナーが設置されており、布で作った人形、フトン、食器類、人形の洋服、子供の使う前かけ、洋服などが置かれております。登園してきた子供達の何名かはすぐにこのママごとコーナーに行き、ジャンパースカートをはき前かけをしめ、お母さんになったつもりなのか、人形の床を作ってねかせ、あわただしく台所に立ちます。白菜やさつまいもを切ってお茶椀やお皿に菊の花びらと一緒に盛りつけテーブルにのせます。

その合間に人形の赤ちゃんの様子をみた

り、だいてあげたりいたします。何とも母親の姿を見せられているような思いがいたします。

こうした遊びが三人～五人といつの間にか仲間が増えお昼がくるまで遊んでいます。そこではきっと楽しい思いの中で子供

達の心が充たされ――大切な時を過しているのだろうかと思います。

＊

一か月近く毎日ママごとをしているR子は兄弟が五人もいて貧しい家庭です。つい此の間一番下の妹が生れました。R子は三番目。下に二人の子供がいます。R子は満たされない気持を人形をいじめながら満たしているのでしょうか、お母さんのようにしながら自分をなぐさめているのでしょうか。三十分も四十分も人形をねかせたり洋服を着がえさせ、ホックをとめたりはずしたり、それは丹念に同じ事を繰り返しております。そして時々人形を抱きあげ頬ずりをして、ニッコリと微笑むのです。私共の入る余地もない程に、子供の夢の世界に遊んでいる様子がうかがえるのです。そんな動作を繰り返したあと、お隣りに住むK子と、いそいそと食事の準備をしたり、かごをさげて買物に出かけたりいたします。

＊

人形に心温る思い出を持っております私は幼稚園におく人形にも心を配りました。子供の心に応えられるような人形を置いております。布団や洋服もお母様方が揃えて下さいました。女児とは限らず男児も又この人形を抱いて歩いている事があります。

洋服を脱がせ、又着せる、この繰り返しが子供にとって、楽しい魅力的な遊びのようです。

子供の時期が終ったから人形とのつきあいが終ったと言うような関係でなく又単なるおもちゃとしてでなく、子供の心を満たし、なぐさめ、又大人へ向って成長していく心の支えのようなものではないかとも思われます。

（浦和母の会幼稚園）

雛の職人衆

——三人の仕事部屋から——

皆川美恵子

雛人形は、一人の職人さんが、頭、衣裳、小道具のすべてを作るのではないそうです。頭を作る〝頭師〟、黒の絹糸を植え込み結う〝結髪師〟、ガラスを吹いて眼球を作る〝眼球師〟、金襴の布を断ち、縫い上げ着せる〝胴師〟、桧扇、烏帽子などを作る〝小道具師〟、冠や簪、太刀を作る〝錺師〟と、多くの専門の職人衆の手をへて初めて出来上るのです。多くの手により少しずつ完成されていく雛には、それだからこそ女子の福をことほぐ力が秘められているといえましょう。

雛職人の中には、七十歳を越えた明治生れの人達も嬉しいことに健在で、一年の間、休むことなく、年季の入った確かな腕を奮っています。私たちは、そっと静かに名人の仕事部屋に足を踏み入れ、やがて初雛として照り輝く人形たちの、息づく様子を覗いてみました。

◆頭師の仕事部屋

床にはあちこち胡粉が垂れて固まり、すべすべした感触が足から伝わってきます。桐のおが屑を正麩糊で練ったものを型に入れ、頭を作ると、まずガラスの眼をつけ、それから頭が完成するまでに、膠で溶いた胡粉を何度も何度も塗っていきます。胡粉は頭作りには欠かせないものなのです。

胡粉の粉が、牡蠣殻が堆積して五百年から千年を経た牡蠣灰であることを、この仕事場の主人より、初めて知らされました。江戸の昔から人形作りには、利根川流域の牡蠣灰が使われており、今でも下流の銚子あたりで採掘された牡蠣灰を用いているそうです。

さて、鼻、唇、耳を作り終ると、胡粉の下に隠れた目を切り出して表情をつけ、口をあけていきます。そして上塗りをしますが、この上塗りだけは、ぼたん貝の粉を用います。牡蠣灰より細かく白く、光沢の出るぼたん貝とは、蝶貝のことです。

「僕は腹を立てたことないよ、腹を立てたりしちゃ、お雛様の顔が怒っちゃうからね」今年七十三歳の頭師の名人、小宮映峰さんはにこやかに語っていました。

◆胴師の仕事部屋

山田松花さんが人形を作るようになったのは、十九歳の時に、祖母さんと京都見物に行ってからのことでした。その時見た京人形のすばらしさに、何としてもその人形がほしいものの、四十八円という高価な額に手が出なかったそうです。ところが、京極で巻藁に頭だけでささって売っているのを見て、東京に帰り、すぐ手紙にお金を添えて、その頭を買い求めました。それから刺繍をたくさんして着物をこしらえ、人形の胴を作り、着物を着せて、とうとう自分で人形を作り上げました。その後、松倉光山の門下に入り、長い修業を積んで今にいたっています。

雛たちの豪華な金襴の衣裳は、張りをもたせるために、まず和紙で裏うちをしていきます。藁で作った胴にそれらの衣裳を着せつけていくわけですが、襟元が一番難しく、特に女雛の襟の重ねには、気を配るそうです。最後に、髪がきれいに結い終った映峰さんの頭がのり、雛は嬉しそうに微笑みます。

◆小道具師の仕事部屋

茂原浅次郎さんは、仕事台の前で、ちょうど随身の背負矢を作っていました。黒い漆が塗られた細い竹の先に、矢羽根として鶏の白い羽根をつけ、赤い糸できりりと巻いた矢でした。一本一本このように丹念に作り上げられる矢は、今では珍しく、多くは（矢以外の小道具もそうですが）プラスチックで機械によって作られています。

桧扇のことを尋ねると、昔は桧を経木のように薄く削る名人がいて、そこから分けてもらって本当の桧扇を作ったといいます。今はその名人がおらず、紙に胡粉を塗り、ペーパーをかけ、松や梅の絵を金箔などを使って描いているということでした。

茂原さんは、昭和六年に発行された『日本雛祭考』（有坂与太郎著）にも、当時活躍している小道具師として、師の渡辺久芳と共に名を記された、この道六十年からの名人です。いつもそばで仕事を手伝っている奥さんと、喜寿を迎えた茂原さんの手になる桧扇を、帰る時におみやげとして頂いてきました。

二つの人形研究紹介

清水いく子

人形についてなされた研究は、はなはだ少ない。ここに紹介する研究は、古いものではあるが、代表的な人形研究である。

(1) ジェームス・サリーの「人形の研究」

倉橋惣三氏は、人形は子どもと深いかかわりがあるという考えの基に、『婦人とこども』第十一巻第十二号（明治四十四年）の「机辺だより」で十八頁半にわたり、英国の心理学者ジェームス・サリー（James Sully）の「人形の研究」を紹介している。その大要を述べると次の通りである。

①人形の定義は未定である（「人形とは何か」という定義を下すことが難しい所に、人形研究の困難さがある。人形は生命のない一の玩具に過ぎないと考える人が多いが、児童にとって人形は生きている）

②人形の種類（人形には、(1)成人が一の型に当はめて作る人形、即、伝習的な人形と、(2)子どもが自己の想像から、自分で作った人形がある）

③人形の選択は子どもの自由である（今迄は、児童に与える人形は、在来の因襲から来るものや、商品として売られているものに限られていたが、持主たるべき子どもの好みに従うべきである）

④成人を象徴した人形と其弊（成人を表した人形の多くは、無暗に立派な衣装を飾るとか、特殊な偉人物を表すとかいう種類に限られている。しかし、これらの高価な人形は子どもの会心の友とはなっていない）

⑤着色した人形と道化た人形の与える感情（それらの人形は、子どもがそれを手にした時は、一寸驚くかも知れぬが、純粋な愛情は育ちにくい）

⑥子どもの手製人形と其価値（成人の手で作られる、どこの店でも見られるおきまりの人形の外に、児童自らの手で作られる人形があることを忘れてはならない。そして、子ども自身に、その一

方を選ばせると、後者、即、粗雑な、不恰好な手製人形を取ることは疑いのない事実である）

⑦腰掛や徳利が何故人形に見えるか（このように人形らしからぬ物質を、人形として取扱う場合が多い所をみると、子どもは人間の容を大まかに暗示している人形を選ぶ傾きがあると思われる。こうした形の暗示は、子どもの初期の描画にも表われている。子どもにとって、円形、楕円形、又は人間の頭や体に類似した形、足に似通った二つの交叉線等の想像が大切である）

⑧人形の撰択と頭髪との関係（児童が、人形を撰択する標準は、体に附いている頭髪等の附属物に影響される）

⑨人形は飽く迄活動的なものである（人間の機能のうちでも手が先に発達することは生理的にも明らかであるが、子どもの人形の知識についても同様である。即、他よりも手についての知識がより多く発達する。これからして、人形は絵画のように静思的なものでなく、飽く迄も活動的なものである。人形遊びの中では人形に衣装を着せる遊びが最も盛んである）

⑩児童は人形遊びで何を表すか（最初は、子どもが人形を抱いていることが、成人の眼に映ずると、子どもの心に一種の誇りともいうべき感情が起り、限りない満足を覚える。それから発達して種々の遊びが行われる。〔例えば、衛生、食事、就寝、看病、保育、葬式等〕

⑪人形は子どもの最も親密な知己である（子どもは人形を、自分の幼児として扱う他に、自分と同年輩の最も親しい友として扱う）

⑫一の人形を好む情と沢山の人形を好む情（子どもには、その両方の場合があり、後者は家族としての単位をなすことがある）

⑬人形が擬人を失う場合（人形遊びでは、結婚式のような目立った儀式や、社会的競戯が行われる。この場合、人形の擬人が失はれ、人形は人形芝居の役者、子どもは、その監督者になる）

⑭粗雑な人形に対した時の子どもの錯感情（子どもは粗雑な人形にでも、一寸人間の恰好さえ付いていれば、優に人間の錯感を呼び起すだけの想像力がある）

⑮粗雑な人形を喜ぶのは児童一般の通例である

⑯人形はどんな物として子どもに取扱われるか（子どもは人形を幼児として扱う。一方、人形遊びは、世界じゅうに存在し、古来から主として女の遊戯として伝わり、その大部分が育児の模倣であったことからすると、母としての立場から人形を愛すると思われる）

⑰人形遊びに於ける子どもの主観的欲望（子どもは、保育される地位を脱して、保育する地位に立とうとする主観的先天的欲望が

あり、人形遊びはこれを満たすものである。ともかく、親としての情愛が、人形遊びの根本となっている）

今後の課題として、子どもの年齢が、青年期になるに従って、人形に対する感情がどのように変化するかを調べることを掲げている。この研究の特色は、他の多くが、単に実験結果の報告に過ぎない傾向のある中で、それを総合し、それから推理して、一般の人形に通ずる真意を明にしようとした点にある。

(2) スタンレー・ホールの「人形の研究」

さて、サリーが、人形の科学的研究の創始者と述べ、論文中にも幾度かふれているところのスタンレー・ホールがA・C・エリスと共に行なった人形研究を次に紹介しよう。

児童研究の創始者であるグランビル・スタンレー・ホール（一八四四―一九二四）が、「人形の研究」を行なったのは、一八九六年、五十六歳の時である。人間を単に身体的、形態的進化論でみるのでなく、人間が生まれてから死ぬまでの成長と変化を内面的にみてゆこうとしていた、いわば、心の進化論者であったホールに、「人形の研究」をさせた深いところにある動機は何であろうか。それを、彼の幼年時代―アシュフィールドやウォシントンで過した田園生活―や、更に、ピルグリム・ファーザーズの一族であったという母方の先祖にまでさかのぼって、イギリスから、メイ・フラワー号で移住する際のことまで重ねて考えてゆくことは、大変興味深いことと思われるが、今回は省きたい。

研究の方法として、彼は八百人の先生や両親の間に、質問表を配り返答してもらう。その返答は非常に変化に富んでおり、大人による幼児の頃の回想録、母親による子どもの観察、及び、個人的な子どもの人形に関する事例等であった。それらを整理し、彼なりの立場から推論を加えたものである。

①**人形の材料及び代用品**（八四五人の子どもの中で、人形の材料についての質問に、蠟（ろう）の人形を選ぶ者一九一人、紙一六三人、陶器一五三人、きれ一四四人であった。子どもは人形の代用品として、枕、棒、徳利、とうもろこし、針、胡瓜、箒、掛釘、椅子を用いる。その他に、箱、水差、ブラシ、サジ、本等々、大人の考えの及ばない代用品が挙げられている。これらは、子どものアニミスティックな空想力と、人形の本性によることは説明すべくもない）

②**人形に対する精神的感情の特質**（良い、冷い、嫉妬深い、悪い、

怒り、行儀が悪い等の順である）

③**人形の食物と食事**（食物を与えることも人形遊びの主要な一部である。食物の種類、与え方が述べられている）

④**人形の就寝**（三二九人が人形の就寝について述べている。人形を揺らしたり、子守歌を歌って寝つかせる）

⑤**人形の病気**（人形は多くの病気―はしか、熱、風邪等を持っている。その看病も人形遊びの一つである）

⑥**人形の死、葬式及び埋葬**（人形の葬式及び埋葬が行なわれるが、一度埋葬した人形を、再び掘り出すこともある）

⑦**人形の名前**（名前は、友人や人形を子どもに与える人によってつけられる。それらの名前は、可愛いとか、お気に入りであるとか、聞いた話の登場人物である等の理由で選ばれる）

⑧**人形の躾**（人形が罪を犯すと懲罰を与えることがある）

⑨**人形の衛生、トイレット**（衣類を着せたり、顔を洗ったり、髪をとかす等の人形の身体を清潔にする遊びをする。）

⑩**人形の家族、学校、パーティ、結婚式**（人形遊びで家族を持ち、学校、パーティ、結婚式、旅行等社会的なことをする）

⑪**人形の付属物**（人形には衣服、食器、家具等の付属物がある）

⑫**その他**（人形遊びの様々な形の相対頻度、人形と赤ン坊との関係、不具の人形、男児の人形遊び―女子だけでなく男児も人形遊びをするが、男女の間で人形に対して持つ感情には違いがある。―等について）

⑬**人類学的メモ**（最後にホールは、様々の文献を用いて、古代エジプトの人形に始まり、日本の雛祭りや端午の節句に至るまで、各国の人形に人類学的にアプローチを試みている。そして、「人形」と「偶像」との関係についても興味深い指摘をしている）

〈参考文献〉

○G.S. Hall "Life And Confessions of A Psycholgist" D. Appleton And Company New York 1924

○A.C. Ellis & G.S. Hall "A Study of Dolls" Aspects of Child Life and Education Arno Press New York 1975

第9回みどり会夏季合宿研修会のお知らせ

○期日　八月二十一日～二十三日

○場所　熱海　岡本ホテル

尚、詳細は次号でお知らせいたします。

大人になってゆく子ども

成長発達のリズムと教育（下）

――子どもの「自然」を考える――

伊藤隆二

子どもはよく生きているか

私にはここ数年来、もちつづけたきた疑問があった。特別な病気をもった場合はのぞくとして、生れたときはどの赤ん坊も同じように呱々の声をあげる。母親の乳房にしがみつき、貪るように乳をのむ。そして半年もすぎると、腕や足に力がついてきて、ハイハイをはじめる。一年近くになると、つかまり立ちをし、やがて初誕生を迎えたころからは、歩きだす。歩きはじめた子どもは知的好奇心にあふれ、何んでもさわり、何んでも見、何んでも追いかける。あとを追う母親のほうがへとへとに疲れてしまっているのに、子どもは少しも疲れず、活動しつづける。遊びつづける。

遊びをせんとや生れけむ
戯れせんとや生れけむ

遊ぶ子どもの声きけば
わが身さえこそ動がるれ

（『梁塵秘抄』より）

しかし、私の疑問はつぎの一点にある。かくも生命力にあふれていた子どもが幼稚園に通いだし、小学校・中学校にすすみ、そして十五歳をすぎたころから、なにゆえに活力を失い、生命はしぼんでしまうのか。もちろん、すべての子どもがそうだというのではない。しかし、少ないからといって安閑としていることは許されない。コレラ患者が一人出ても、一億人が震憾するではないか。

ほんらい、生命力にあふれているべき子どもが、特別の病気にかかったわけでもないのに、息もたえだえになっているというのは、これは大問題である。今後、ほかの子どもたちに波及していかないという保証は全くないのだ。げんに、活力を失った子ども、それも肩こりとか高血圧症とか、五十歳以上になってからでないとおこらないといわれていた病態に早くも陥っている子どもの数は確実にふえているときけば、だれでも日本の将来は危いと感ずるのではなかろうか。

では、なにゆえに、今の子どもたちから活力が消えうせつつあるのか——。その原因をつきとめ、一刻も早く、子どもたちのほんらいの活力をとりもどさねばならない。私はここ数年来、関心をよせつづけているのは、まさにその点にある。

× ×

私にわかったことがいくつかある。なにしろ、今問題としてあげたような子どもの相談がものすごく多くなったのだから、私にはそうした子どもたちに共通している点が、自然につかめてきたのである。それを要約すると、つぎの三つになる。

㈠その子どもの成長発達のリズムがくずれている。

㈡その子どもの「その子らしさ」が「十分」発揮されずにいる。

㈢その子どもに心の安らぎの場がない。

子どもの成長発達のリズムがくずれるのは、その親や教師があせっていることに最大の原因があると、私はみている。かれらはなぜそんなにあせるのか。ピラミッド型の社会構造

の上へ上への這いあがり競争に子どもを参加させ、一刻も早く勝利をおさめようとしているからにちがいない。親や教師に子どもがその競争に勝つことで、しあわせになれると、信じ切っている。だから、他者よりも一歩でも先んずることが「善」で、おくれることは「悪」だという単純な基準に支配されている。その基準に照合すれば、子どもの、とくに知的能力を早く開発することが「善」だということになる。いわゆる知的早期教育への期待が高まるのは当然だといえよう。

「三歳児の漢字教室」「四歳児の算数教室」、それに各種の英才教育研究所などが、雨後の竹のこのように、生えだしたのは周知のとおり。

這いあがり競争に勝つのに絶対有利な（とみなされている）〝有名〟幼稚園、〝一流〟大学に直結している小学校・中学校にはいるためには「幼稚園からでは遅すぎる」のだという。いやいや、書店には「生れてからでは遅すぎる」という本が並べられている。

では、このような早期からの知的教育は、ほんとうに子どもの知的能力を開発促進するのだろうか。そのことを確認したうえでの知的早期教育がおこなわれているのだろうか、とそんな疑問が、当然、わいてくる。

知的早期教育の必要性を唱える人は、ひとの頭脳――とくに大脳皮質系の発達が、乳幼児期に急速にすすむためには、より多くの知的刺激（最近は情報という）を与えなければならない、逆にもしこうした情報を欠いた場合はアヴェロンの野生児や狼に育てられた子どものように、能なしになってしまうという。全くそのとおりだと、私も一応は認める。おそらく、現存した人間のなかでもっとも知能指数が高かったといわれているジョン・ステュアート・ミル（英国の哲学的・経済学者）は、過酷な、ともいえる父親の知的早期教育の輝かしい一つの成果であったといえるだろう。ミル自身の手記によると、「父自身の考えにしたがって、最高度の知的教育を与えようと、前例皆無でないとしても、世の父親がめったに見せたためしのないほどの労力と注意と忍耐とを傾け、」三歳ごろからギリシャ語を、八歳からはラテン語を、十三歳からはリカードやアダム・スミスの経済学を教えこんだという。ミルは十二歳までにラテン語でギリシャ・ローマ時代のすべての書物を読破し、数学は難解な微分・積分の問題をことごとく解決した天才になっていた。

モーツァルトもベートーベンも早期教育によって偉大な作

曲家になりえたのだという定説はもう一昔前に成立していた。

野生児のような〝能なし〟もミルのような〝天才〟もつくろうとしてつくられるのだといえば、教育万能主義が幅をきかせることになる。おそらく、第二のミルや第二のベートーベンを夢見ながら、わが子に早期からの知的教育をこころみた親は、これまでにも相当数、いたのではなかろうか。

では、それらの知的早期教育はみな成功したのだろうか。第二のミルやベートーベンが続出したという話はきいたことがない。それどころか、そのような無理強いのために〝不幸〟な生涯を送ったという例のほうが、多いのではないだろうか。

ドイツのシュレーバー判事も父から知的早期教育を受けた一人であったが、かれは四十二歳のときに妄想病で入院し、かれの兄は三十八歳のときにピストル自殺をしたという（シャッツマン『魂の殺害者』より）。わが愛するミルは二十歳になった秋に、突然、精神の危機に見舞われ、父親を軽蔑し、六十七歳で亡くなるまで、一度も幸福感と心の安らぎをえることがなかったのだ。また、モーツァルトは幼児期から病弱で、六歳のとき肺を病み、九歳のときには精神錯乱に悩み、十七歳ごろからは収入の道もとだえて貧窮の極に達し、そして三十五歳の若さで他界した。

モーツァルトのように神童ぶりを発揮しなかったベートーベンは父から何度も鞭打たれたという。かれの幼児期には、何一つ楽しみがなかった。そのピアノ練習の日課はあまりにきびしかったので、涙のかわく間もないほどだった。生れつき醜かったベートーベンは性格も暗く、近所の少年たちからも嫌われ、心気症に悩みつづけていたのである。

危険な知的早期教育

今の多くの親はわが子が、ピラミッド型の社会構造の上への這いあがり競争に勝つためには、幼児期からの知的早期教育は絶対に必要だと信じている。そして、ほんらいならば、早くて九歳以後に学ぶのが最適だと考えられている系統的な学問を、三、四歳の幼児に強いている。三、四歳の幼児の思考は、すでに述べたとおり、即時的で、論理性はまだ乏しい。「いま」という時・空間に生きている幼児のあたまに、「過去・未来」という時間的ひろがりを必要とする学問を注入したら、いったいどういうことになるだろうか。こたえは

簡単である。みせかけの〝天才〟になるにきまっている。

今から十年ほど前に、そのような〝天才児〟が大阪にあらわれて話題を集めたことがある。なんと、二歳十一ヵ月の男児が漢字二五〇字をすらすら読めるという。そこで、ある心理学者がこんなテストをおこなった。床に赤、白のボールをばらまいておき、「赤」と「白」の貼り紙をつけたカゴを二つ用意する。「さあ、坊や、赤いボールは赤のカゴに、白いボールは白のカゴに入れてちょうだい。」ところが、カゴに入れられたボールは、赤も白もまじり合っていたのだ。なんのことはない、「赤」「白」という漢字は知っていても、その漢字と「赤い色」「白い色」とが結びつかないのだ。彼の知っていた漢字は、色とに無関係な、アカ、シロとよぶ〝もの〟でしかなかったのである。

この坊やはいつも首から、父親の書いた漢字ノートをぶらさげていた。そして一日中、にらめっこ。そのうち二五〇字もおぼえてしまったのだという。これでは〝情報〟が多いといっても、計算のできる〝学者犬〟の芸と同じではないか。

× ×

知的早期教育によって、知的能力がめざましく伸びることは、だれもが認めるところである。その開発された知的能力が生涯にわたるしあわせとどうつながっているかという視点を見落してはならない。多くの例は、しあわせどころか、不幸をもたらしていることを示している。では、どうしてか。

㈠子どもに少しでも知的教育の効果（漢字をおぼえた、計算ができるようになったといったたぐいの成果）があったことを知った親は、その子どもにいっそうの期待をかけることになる。その期待は、多くの場合、その子どもにとっては過重の負担になる。

㈡子どもに早くから、おとなの世界に共通する基準なりワク（ものの考え方）をはめこんでしまうと、子どもらしい発想や何ものにもとらわれない豊かな想像性の芽がつみとられてしまう。

㈢幼児期（私のいう〝幼虫〟の時代）の特長は「体得」を中心とした活動にある。手足やからだ全体を思う存分、動かし、文字どおり、体あたりで人間として生きていく知恵や技術を身につけていく時期である。いわば能動的時代である。多くの知的早期教育は子どものそうした活動をおさえて、一方的な知識の注入に偏している。子どもは〝受身〟になる。

つまり、幼児期に知的早期教育を強いれば強いるほど、結果的に、子どもの成長発達のリズムはそれだけ大きくくずれていく。

成長発達のリズムのくずれた子どもは、しまいに活力を失い、その子らしさを発揮する機会がなくなっていく。

ほんらい、子どもはさまざまな体験をとおして自分の得意とする能力なり才能（天分という）を発見し、それを存分に発揮する機会を待つものである。〃幼虫〃がときがたてば「蛹」になり、「蛹」はときがたてば「蝶」に変態するように。

しかし、もし逆に、親や教師のきめたことを、それも受身の形で、たえず、させられていたならば、子どもの天分は剪定され、〃没個性的〃になっていく。

なるほど〃優等生〃然としているが、これは先天的に与えられたからだの骨を削り、肉をそぎ、鼻にプラスチックを注入してつくりあげた〃人工美人〃と同じだということにだれでも気づくはずである。

しかし、美容整形は不自然だと笑っている人でも、自分の子どもが遊ぶ時間も、寝る時間もけずりとって、知的早期教育に打ち込んでいる（いや、させられている）姿をみて、「不自然」とは、なかなか思わないようである。ましてや、整形美容をする人にむかって、それほどまでして「美人」になりたいものかと非難しても、わが子にむかって、「それほどまでして〃一流大学〃にはいりたいのか」と小言をいう親はいないのではあるまいか。

× ×

活力を失った中学生や高校生と接してみて驚くのは、かれらはいつも何かにおびえているということである。たえず、おどおどし、たえずいらいらしている。

そういう生徒をつれてくる親に接してみて、もっと驚くことがある。口数や小言が多いということである。いや、それは表面的なことにすぎない。じつは底知れぬ不安をかくしているということである。その不安が子どもへの過剰な期待という形になってあらわれるのだと解釈することができる。

親の過剰な期待は子どもにとって重荷になり、子どもは沈潜していく。それをみて、親は小言をいう。そしていっそう不安になる。他者に負けてはたいへんだという気持からあせるようになる。親があせればあせるほど、子どもはおびえる

ようになる……。これは悪循環というものだ。

子どもはいっそうリズムをくずし、その子らしさ（天分）を失い、活力をなくしていく。

×　　×

不安をもつ親のいる家庭は、子どもにとっては心の安まらない場所である。

しかし、そういう子どもほど、何はさておいてもほしいのは心の安らぎの場所なのだ。

多くの心理治療家は技巧をこらして子どもの悪癖や不安を解消しようとする。じつは、右のような親や教師の一方的な教育（人為）によって、活力を失っている子どもに、さらに技巧をこらした療法（人為）を施しても、根本治癒にはいたらない。

子どもが求めているのは「人為」ではなく、「自然」なのである。だから、不幸にも活力を失った子どもがいたら、その子どもに必要なのは「教育」という名の人為ではなく、自然なのだということになる。

では、この場合の「自然」とは？　文字どおり、天然自然の世界に放つことがのぞましい。しかし、自然破壊のつづく都会では、それはのぞめない。

では、どういう方法があるか。私の答は一つしかない。それは「何んにもしないことである」。これは人為（＝偽）ではなく、無為である。いいかえると、子どもの自然の（いや宇宙の）成長発達のリズムにもどることである。

子どもだけではない。親も教師も、である。宇宙のうずに身も心もゆだねて、おおらかに生きることである。

人為を捨てることで、はじめて子どもの真実の自己が実現する。子どもは自ら、なろうとしてなっていく。そのことをどこまでも信ずることが正しいのである。

幼児教育は子どもの真実の自己の育成の出発点にあることを、私どもはもう一度、確認すべきである。

＝了＝

（神戸大学）

○参考文献

『育つということ』（伊藤隆二著）柏樹社
『よく生きるということ』（伊藤隆二著）柏樹社

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十四)

津守　真

ゆっくりと静かに動いていた雨の日の一日

五月一日

朝、私は室内の椅子に坐っている。

机の一つで、鯉のぼりのうろこ貼りが断続的につづいている。うろこの紙を貼ってゆく作業で、子どもは入れ替りながら、何人かの子どもがやっている。あとの子どもたちは、それぞれが自分のしたいことをして動いていた。担任の先生は、部屋の隅の製作材料をおいてある机で、ほとんどの時間を、セロテープ切りなどをしていた。私は、午前中の前半の時間は、ほとんど手があいて、見物しているような形で過した。後半は、廊下で箱積木の電車に乗って過した。

この日は、私は、子どもの中に身をおき、いつでも子どもの要求に応じられる態勢だったが、ほとんど観察者の役をとることができた。担任の先生のまわりにも、あまり子どもはいないで、子どもたちはそれぞれ動いていた。雨の日など、子どもたちがぶつかり合ってとても大変な日もあるけれども、この日のように、落着いてゆっくりと静かに動く一日もしばしばある。愛育の知恵おくれの子どものグループでも同様の経験をしたことがあるし、家庭の保育でも経験したことが何度もある。こういうときは、おと

なとのかかわりを求めないでも、子どもたちは、それぞれが自分の生活の中で追求するものがあって、満ち足りているのであると思う。

この日は、五歳児の一学期の最初のころの一日であって、この日の動きを見ていると、これまでにつみ重ねられてきた、幼稚園での生活から生れた一日であることを思う。私と子どもとの接点から見れば、ゆっくりとした動きであるが、ひとりひとりの子どもの生活に視点をおいてみると、激しく速く動いている。しかし、それぞれが、自分の目標をもって、楽しんで動いているときには、保育者や観察者にとっては、ゆっくりとした有機的な動きととらえられるのであろう。次に、私が観察した範囲での子どもの動きを、もう少し具体的に調べてみる。

私が室内で椅子に坐っていると、部屋の一隅にいたMくんが、室内を横切って私にボールを投げる。私はボールを受けとるが、一瞬、目が合い、にこっと笑う。この日は私とMくんとのつきあいはこれだけであった。Mくんは私にボールを投げてきたが、Mくんには自分の生活があったので、これ以上、私が相手をする必要はなかったのである。このあと、何回か、Mくんの活動に目がとまった場面があった。女児mが、他の女児二人と椅子に坐っているところにMくんがきた。そして、mと話を交しながら、その隣の椅子にじっと坐っている。mはクラスの中でも、一人になりがちな子どもで、強いMとは対照的な女児である。その女の子とMくんとが話をしている場面を見ることは、私にとっては、きわめて珍らしいことであった。それからしばらくたって気がつくと、Mくんは女児二人と画用紙に野菜をかいて切り抜いている。いままでつき合ったことのなかった女の子とことばを交し遊ぶことができるほどに、Mの世界に自分と異質なものを包容するゆとりができたと考えられよう。

男児Iはピストルと言って、自分が作った銃をもってくる。今日は何人もの男児が銃を作っている。Iも私にピストルを見せにきたあとも他の子どもたちと銃をつくりつづける。Iは昨年入園して以来、私としばしばつき合いがあるので、作っている途中で私に見せにきたのである。

男児Kが画用紙を帯状に切り、輪を作って、手錠だと言って持ってくる。私の手にはめる。いつもは荒々しくとびかかってくるような感じのKであるが、何かおっとりとしている。ひとりでいくつも手錠を作り、自分の手にはめてためしているのが見える。

男児Yは画用紙を切り、四角の筒を作り、色をつけて電車を作っている。画用紙を菱形に切ってパンタグラフを作ろうと苦労し

ているが、私のところに持ってきて、やってくれと頼む。Yは他人から断わられると、じきにあきらめてしまうことが多いことに気付いていたので、私はすぐに手伝って作ってやる。そのあと、Yはひとりで電車を完成させようと、うつむいて電車をいじりつづけている。

いつのまにか、たくさんの子どもたちが遊戯室にゆき、室内には、電車や銃を作っている子どもたちが六人くらい、積木をしている子ども数人、ままごとをしている子どもが数人になる。

女児Wが私のところにきて、私によりかかり、いろいろと話しかける。「お兄ちゃん何年生か?」「そうだな、二年生だろう」「ちがうもん、お兄ちゃんは小学校の三年生だけど、大きいから六年生にまちがえられるの」……「おじさん、何してんの?」「Wちゃんみてるの」「話してるじゃない?」「そうか、話してるんだ」ハ……、と話が冗談ぽくつづく。女の子が二人ほど加わり、女の子めいた話になるが、じきに私のところから去り、どこかにいってしまう。こうして子どもがしばらく私のところにいても、自分たちの遊びの方が面白くて、私は後に残される。それだから、また私は観察者になることができる。

男児Kは、ひとりで戸口の傍でかなり長い間じっとしているのが目につく。ひとりでつまらないのかと思って見ていた。大分長い間の後、指人形とつみきをいじりはじめ、そこに男児Tがきてしゃべり始めたと思ったら、二人で廊下の方に出ていった。長い間一人で戸口に立っていたのは、一人でいたかっただろうと思う。

女児mはひとりで絵本をみている。何の絵本かと思って注意して見ると、白雪姫である。この子どもは、突然白雪姫のおばあさんやお姫さまのせりふを言って私に近づいてきて驚ろかされたことが今までに何度かあった。こうしてひとりで白雪姫の絵本をじっと見つめているのを見ると、今も白雪姫の世界の中にいるのかと察せられてほほえましくなる。突然mは私のところに近より、「来て」と私の手を引く。私はmと一緒に廊下に出ると、「遊ぼう」と言ってなわとびのなわを持ってくる。なわとびをとぼうとするが、なかなかうまくいかない。まもなく、他の女の子と廊下で、ラケットでボールころがしをはじめる。

さっきまで銃や手錠を作っていた男児、I、K、Taらが廊下に椅子を並べて電車にしている。画用紙に線をひき、表にして、「新たまがわせん」「山手せん」「きんてつロマンスカー」など書くことに余念がない。私は箱積木や椅子で作った電車の中に腰をおろすが、みんなそれぞれのことに忙がしくしていて、私は何もやることがない。

Dが遊戯室の方から息を切って走ってきて、何か言って去る。

額に汗を一ぱいかいて、エネルギッシュな感じである。三歳、四歳のときのDは、動きも鈍く、友だちとのつき合いもうまくいかなかったので、こうして汗をかいて走ってきては走り去ってゆくDを、私は不思議な思いで見る。ここにも激しく動いている子どもの世界がある。

廊下の電車の中で、女児eが私の傍に坐っている。さっき室内で、「どうにもならないの」と言っていたことを思い出し、私は小さな箱つみきを、「お弁当」「コーヒー」など言って差し出したが、だまっていて受けとらない。それでいながらずっと私の傍に坐っていた。この女の子とは、私は今まで殆どつき合ったことがない。何か心に屈託がありそうで、続けてゆっくりつき合いたい気持が残った。この一日の中で、おとなとのつき合いを求めていた唯一の子どもであったと思う。残念なことに、じきにお弁当の時間になってしまった。

ここに見たように、それぞれの子どもに目をとめると、どの子どもも、それぞれが追求して動いている生活があって、それがおとなとの接点では、ゆっくりと動いて調和のとれた一日と感じられたのである。もしも、ひとりひとりの行動をもっと詳細に検討してみるならば、その追求しているのものは、外から与えられた課題ではなく、それぞれの内心から促されたものであるのを見ることは容易であろう。こうして、ひとつの集団の中で、それぞれの人が自分の心の奥深くから出た望みに従って楽しみ、相互に調和がとれているとき、それが民主的な社会と言えるのではないだろうか。内心から促されたものを追求している生活、それに伴う満足感と希望とがなくて、意見だけを言わせてみても、実質的な民主的社会とはならないだろう。この一日のように、子ども自身が満足し、他の子どもも満足して共に生活して全体がゆっくりと動いてゆく体験をするとき、民主的な社会生活の原型を把握する一つの基礎がつくられているのではないだろうか。

五歳児の年長組になって、四歳児よりも一段と高度な保育があるのではないかという予想が私の心の中のどこかにあったことを、私自身否定することはできない。しかし、この日のゆっくりと静かに動いていた一日にふれて、これは立派な五歳児の一日であると思った。とくに目立ったことや、まとまった活動があったわけではない。それぞれが自分のことをして、ゆっくりと動いていただけである。このことは、この後の五歳児の生活についても同様である。それぞれの子どもが心から満足して動く生活が重要なのであって、それをぬきにして高等な活動計画を考えようとし

たら、ゆきすぎになるであろう。そして、五歳児は幼稚園としては最年長なので、急に高度な計画を望む心理がおとなの側にはたらくのではないだろうか。

十数年前に、この同じH先生のクラスで、私は五歳児の保育の継続的な観察記録をとり、それを「五歳児の保育」と題して、本誌の誌上に連載したことがあった。そのときの記録に、同じ五月一日の記録がある。十数年を距てた記録を比較するのに、五月一日にこだわる理由はないのであるが、担任の先生も観察者も、部屋も同じであるので、少しばかり比較してみたい。そのときには、私は客観的観察的記録者であり、今日は保育に参加しながらの観察者であるという相違がある。しかし、この日に限って言えば、私は観察者として全体を見ることのできる状態にあり、条件としてそれほど大きく違っていないと思う。この十数年間に、H先生の保育が少しく変化してきており、この点において、比較をしてみることは興味深い。

昭和三十九年「五歳児の記録」における5月1日

（幼児の教育64巻6号）

鯉のぼりをつくりはじめる。

子どもの日までに鯉のぼりをつくる予定がある。目標としてひとりが二尾の鯉をつくってほしい。

この点が、担任の先生の考えとして、前回と今回とで相違する大きな点である。今回も似たような鯉のぼり作りをしているが、前回のように全員が二尾の鯉をつくるようにという考えはないようである。もちろん、前回も、その目標は一週間か十日の間に全員が作ればよいので、十分にゆとりはある。しかし、担任の先生の側に、このような目標があると、それに従って子どもの動き方は違ってくる。

朝、ちぎり紙をはった鯉のつくりかけが机の上においてある。その机のまわりに四、五人の子どもたちが集まってきて鯉をつくりはじめる。先生は紙を持って子どもたちのところにくる。先生は紙を半分におってまわりにいる一人ひとりの子どもに、ここに鯉をかいて二枚いっしょに切るようにはなしている。ちぎり紙のをつくってもよいし、クレヨンでかいてもいいし、などとはなしつづける。紙の大きさは子どもたちがこのくらいのをつくるといってくるのに応じて先生が準備する。先生もつくりかけのちぎり紙の鯉のつづきをつくりはじめる。子どもたちが入れかわりにつく

っていて、結局半数くらいの子どもが鯉をつくった。十cmくらいの小さい鯉から一mくらいの大きい鯉などいろいろな鯉ができる。

この記録を今回の記録の最初の部分と比較してみると面白い。先生は鯉を作っており、何人かの子どもが一緒に鯉を作っているところは同じである。作るときの先生と子どもとの会話の内容もよく似ている。しかし、前回の5月1日の記録では、先生は子どもをつかまえて鯉を作らせようという積極的な意気込みが見えていて、子どもの側に、銃や手錠や電車を作ろうという発想の出てくる余地はない。次に前回の記録の中から、Eという男児の行動をぬき出して追ってみよう。

E「先生、こんなに大きくなっちゃった。」
先生「いいわね。Eちゃんそれぐらいが。はるのをやってもぬるのをやってもいいわよ。」
E「お母さんにははるのをやって、お父さんはぬるのにしようかな。」
先生「それもいいわね。ずいぶん長い鯉で、はでにおよぐでしょうね。」……
Eが黒い紙をちぎり紙にしてうろこにしているのをみて、
先生「こういうこいのぼりもいいわね。だんだんうろこがかさなるんですって。」と皆にみせる。……
EとTはさっきから二人でしきりにはなしをしながら作っている。
E「ぼくの方が大きいね。」
T「ちょっとだけね。」
E「二つ一緒につけると、お父さんとお母さんみたいだね。」
Eは顔をあかくして一枚一枚うろこをはっていたが、とうとう途中で先生のところに持っていく。
先生「あら、すてきになりましたね。せっかくこんなにきれいにできているから、あした、つづきをしましょうね。」と棚の上においておく。
Eはとぶようにして庭にでていく。

砂場で

男児たちはしゃべるで砂山をつくり、頂上にくぼみをつけて、水を流す。
E「ずいぶんおもしろいね。」
M「あ―、つづいた、つづいた」じょうろに水をくんできて、水を流す。
R「わ―つながった。つながった。」
次の瞬間砂山をくずし、丸太で砂地をたいらになでつける。

E「こちらは工事中だから水をいれないで。」
E「セメント下さい」とRのバケツをうけとり、砂地の上にどろどろの砂をなでつける。
E「これ、おべんとう終ったら、すごいだろうな。セメントが固まって。」このようにして砂遊びはおべんとうになるまでつづく。

この記録にみるように、Eは鯉のぼり作りの終りのころは、鯉のぼりを作るよりも、他のことをして遊びたくなっていた。戸外での子どもたちの面白そうな遊びに魅かれていたのかもしれないし、あるいは自分らしい活動にもどりたくなっていたのかもしれない。先生はEのその気持を察して、「あしたつづきをしましょうね」と言って、Eが鯉のぼりからはなれることを承認する。するとEはとぶようにして庭に出てゆき、砂場で遊びはじめる。もしもこの日に、Eが砂遊びをすることが許されなかったら、この日の幼稚園の生活はEにとって不満足なものに終ったであろう。また、もしもこの朝、鯉のぼり作りをしないでE自身の作りたいものを作ったとしたら、それでもよかったであろう。

私はこのように記して、十数年前の記録にある鯉のぼりの保育を否定しようとするつもりはない。このときの「五歳児の記録」にあるように、このときの一年間余の保育の観察記録は、誘導保育の一つの典型を見せてくれるものであって、何週間もかけて「おもちゃや」や「動物園」などができてゆく過程を見直すと、今でも私自身の内心が躍る。この記録や、その他の誘導保育の記録を見ると分ることであるが、そこでは、先生自身がこうした大きな製作を作り上げてゆくことに情熱をもっており、先生の傍にゆくと、子どもたちも何かそれをやりたくなるような熱気と喜びを感じたのではないかと思う。そういう時期の先生にゆきあった子どもたちは、先生から得るものも大きいであろう。この点でも、保育はおとなと子どもとの人間的なかかわりが原動力となって動くのであると思う。

その同じ先生が、同じ五月一日に鯉のぼり製作をしながら、異なった一日を作りあげていることに実に意味深いものを感じる。今年のこの日の一日に、どの子どもも満ち足りて得るものがあったであろうことを私は疑わない。ここには私が簡単にことばで尽くすことのできない先生自身の成長があるのだと思う。

子どもと長い間つき合っていると、次第に、自分とは異なった人間のそれぞれの仕方で成長してゆくのであることを悟るようになる。見るところがかわれば、保育もまたかわってくる。子どもとかかわりながら、おとなも成長してゆくところに保育の営みがあるのであると思う。

（つづく）

史料紹介

エリザベス・ギャスケル『マイ・ダイアリー』①

笹川真理子 訳

エリザベス・ギャスケル夫人（一八一〇――六五）は、イギリス、ヴィクトリア朝における女流小説家として、特に、処女作『メアリー・バートン』においてよく知られている。

ギャスケル夫人は、結婚の翌年、最初の子を死産した為、一八三四年九月十二日、この日記の献ぜられた長女マリアンヌが生れた時には、母なる喜びはひとしおであった。幼い生命をもった娘への限りない愛と、初めて母となった不安は、日記に色濃く表われている。日記は、一八三五年三月十日から一八三八年十月二十八日まで書かれており、その間に二女ミータも生れている。よってこれは、育児の合間に書きつけられた、マリアンヌの生後六か月から四歳一か月までと、ミータの一歳八か月までの成長記録といえる。

史料として紹介していく以下の日記は、マリアンヌの息子、つまりギャスケル夫人の孫によって、ギャスケル研究家のクレメンス・ショーターの手に渡され、一九二三年、私的に五十部の限定出版をなされたものの翻訳である。

私のいとしいマリアンヌ！　あなたにこの本を「献げ」ます。もし、私が自分の手でこれをあの娘に手渡す日まで生きていなかったとしても、この本は、幼い娘の人格の育成に注がれた母の愛と不安に打震えた日々の形見として、あの娘のためにとっておいてもらえることでしょう。あの小さな娘が、いつか母となった日には、他の母親の経験に興味を持つかも知れません。恐らく少なくとも、自分の幼い時の人となりについて知りたいと思うでしょう。私は、（もし、あの娘がこれを見たならば）、私達を分かち難く結び合わせている愛と希望の片鱗にでも触れてくれたらと願っています。その愛は地上のすべての愛に優るでしょうし、その希望は、たとえお互いがこの地上では別れ別れになったとしても、この世にある限りよく生きようと努めることが、母と娘を結ぶ愛の絆、それは限りなく尊いものでありながら切れやすくもろいものでもあるのですが、それをより直して、再び結び合わされますようにという希望なのです。

一八三五年三月十日　火曜　夜

あさってでマリアンヌは六ヵ月になります。私は、このささやかな日記をもっと早く始めていたらよかったのにと思います。なぜなら、(十二ヵ月前には、この考えを一笑に付したことでしょうに)もうすでに性格の多くの兆しや何かが現われて来ているのですが、それを今はもうはっきりと思い出せないからなのです。まず、私はあの娘を精神的にとらえてみましょう。あの娘はとても機嫌の良い子と言えるでしょう。それは時々は小さなかんしゃくをおこして、短気という言葉がぴったりの時もありますけれど。それにまた、あの娘は小さな事にとても強く我を張ることもあります。私が思うには、本当に頑固なのですが、そんな言葉はこんなかわいい娘にはあてはまらないものなのです。しかし、概してあの娘はとてもいい子なので、私は私の手に授けられたものが、あまりにもすばらしく美しいので、十分に感謝し尽せないように思われます。ところが、それが責任を重くしているようなのです。万一、私が不注意に、あるいは気のゆるみから、誤った方向へ導いたなら！　故意になんて、母の心にはありませんから。無知や判断の間違いから、誤った方へ導くかもしれませんし、恐らく頻繁にそういう事がおこるでしょう。でも、ああ神様！　私を正しくお導き下さい(それがあなたの御心なら)。そして、今感じているこの強い責任感を、私に持ち続けさせて下さい。そして、おまえもね、私のいとしい娘よ、もしこれを読んで、おまえの小さい時に犯した私のあやまちを知っていやな気持になったとしても、どうぞ私を許してね！

マリアンヌは、今や日ごとにおもしろくなってきています。あの娘は何でも見てつかもうとします。今では、かなり距離に対する感覚がでてきて、二ヵ月前までしていたように、光の筋をつかもうなどということはしません。あの娘の視覚は、最近とても発達し、遠くの物が見えるようになったばかりでなく、それらを区別できるようになりました。たとえば、今日、私は居間であの娘を抱いていて、パパは門を出ようとしていたのですが、あの娘は確かにパパを知って、笑って足をけったのです。あの娘は、好きな人にはっきりとした好意を示し始めています。私の所へ来ようと、小さな手をさし出します。きっとパパにもそうすると思います。あの娘は、顔の表情をとらえて、すぐにそれに合わせようとします。たとえば、私達が笑えばあの娘は笑います。また、私がウィリアムの朗読に耳を傾けている時、あの娘がまるで言葉を全部理解しているように、真剣な、まじめな顔をしているのを見るのは、何ともおかしいものです。私は、あの娘の関心を引いたものは何でも、あの娘が見たいだけ見させるようにしています。そして何かとても一心に見ていると思われる時には、あの娘をそこへつれて行き、その物にあの娘のあらゆる感覚を働かせるようにしています。もし害がないと思えば、なめることさえも。私の目的は、あの娘に集中力をつけさせることなのです。

あの娘は目下、動きをとても楽しんでいます—踊ったり、はねたり。そして、むすんでひらいてが大好きです。私は、この年齢の子がこんなに続けざまにしゃべりまくるとは思いませんでした。あの娘は、ちょうど会話でもするように調子を変えながら、叫んだり、つぶやいたりして、自己流に話すのです。あの娘の小さな胸によぎっているものは何なのか、知ることができたらいいのに。あの娘は歌うようなものは何でも好きですが、ピアノはこわがるようです。今日、私がピアノをひき始めたら、泣き出しそうにさえなりましたから。

概して、あの娘は、恐れとか恥ずかしさというものを、何も持っていないようです。あの娘を抱こうとする人の所へは、誰であっても行きます。確かめるために、知らない人をじっと見つめ、彼らが部屋にいる間とても気になるようですが、それでも泣いたり、私にしがみついていることはありません。私はこれはとてもいいことだと思います。あの娘がそうするのは、私にとって大変嬉しくかわいいものなのですが、もし他の人の所へ行くのをいやがる癖がついたら、残念です。

次に、あの娘の「身体」の特徴について。あの娘はなんなく二本の歯がはえました。でも、私はもっと困難な事が待ちかまえていると思います。あの娘はとても太っているので、私達はあの娘に足首を全く使わせないようにしているにもかかわらず、手足が大変じょうぶです。がそれでも私は、歩くのは遅い方がいいと思っています。そうすればその間に、小さな足がずっとしっかりするでしょうから。この点で、召使達がいろいろしてくれるのを押えるのはむずかしいでしょうが、私はあの娘が自分で歩くことを学び、人の助けを得ないようにしたいものです。あの娘はかなり長いこと床に腹ばいになり、足を蹴ったりしますが、それは私が大変早くから習慣づけたことで、あの娘にとっても役立っています。あの娘はおきている内にベットへ行くのですが、これも私が早くに始めた習慣です。一般に行なわれているものかどうかはわかりませんが、大変に満足すべきものです。あの娘は、一、二度ひどく泣いて、私をとても困らせたのですが、あの時あの娘はどこかが痛かった訳ではなく、それどころかとても元気で、ただ抱いてもらいたい為にそうしていることがわかったので、確固たる態度をとることができました。もっとも時々、あの娘と同じ程泣いたこともありますけれど。私はあの娘が眠るまで（極端な場合は除いて）、あの娘の元を離れません。いつもの時間に（六時）ベットに入れられると、あの娘は着がえをしている内に、とても眠くなります。私が着がえの際中に、あの娘に話しかけたり、一緒に遊んだり、興奮させたりするのは好みません。しかし時には、あの娘は寝なければならないのにとても遊びたがるので、部屋を一めぐりするか、二度行ったり来たりするかしてなだめなければなりません。それでもまだおきたままベットに置くことになるのですけれど。またある時は、ちょっと泣いて、私がゆりかごの中であの娘をあおむけにさせると、抱かれるものと思って一瞬泣きやみ、嬉しい時にいつも発するような独特の小さな喜々とし

た声を立てたりもします。

泣き声は私にとって、大変むずかしいものです。本によっても違いますし。ある本には、「泣いてねだる物をけっして与えるな」と書いてあります。また別の本には、(Mme Necher de Saussure の『進歩的しつけ』で、この問題について私の読んだうちで一番良く書かれている本)「子どもの涙はとても非痛なものであるから、なるべく涙を出させない、精神の穏やかな安定をはかることが必要である」と書いてあるのです。ですから、私は自分で、きまりを決めなければなりませんでした。思ったようには、そのきまりを守り通せなかったと反省していますが、これはよいきまりであったと今も思っています。私達は、泣き声は子どもが自分の要求を表わす唯一の言語であるということを知らなければなりません。それは、「おなかがすいた、とても寒い」と言うことを伝える、ささやかな方法なのです。ですから、私は泣いたからと言って、求めるものは何も与えるなという金言を実行しなければならないとは思いません。もし泣いている理由が、あるものを手にすることでしたら、私は不必要に子どもに我慢を強いるよりは、私自身のささいな仕事や目的をあきらめても、すぐにそれを与えるでしょう。でも、子どもがその物を手に入れることが不適当と思われるならば、子どもがどんなに泣いても絶対に与えない方が良いと思います。一・二度泣きおとしをやってみれば、子どもは一声泣くか、さもなければ欲しいものを伝えるだけで十分なことがわかるようになるでしょう。そして泣き癖はなくなると思います。私はこのやり方を不完全にしか守れませんでしたが、それでもマリアンヌの泣く発作を何度も押えたと、ほぼ確信しています。子どもは、初めいらいらさせられて泣くが、次に、泣けばいらいらが解消されることを知って、悪い泣き癖がつくと、どこかで読んだことがありますが、これは本当に的をえていると思います。子どもを何かの原因で—不規則であったり、あるいはあわない食物、着心地の悪い衣服、窮屈な姿勢など—不必要にいらだたせないように、子どもにかなりの犠牲を払うのは、母親たるものの義務であると思うのです。この原則に、私達はもっと心を向けるべきでしょう。

私はいろいろなきまりを定めていますが、そして、これまでの娘への義務を誠実に果たしてきたとは思いますが、そのきまりを必ずしも十分守ってきたとは思われません。私は時々、あの娘の良さは私のきまりが効を奏したからだというおごりが、私の心にあるような気がして不安になります。が、それは本当は、これまでとても健康であって苦痛を受けることもなく、どんなに感謝してもしすぎることはない、神様のお恵みがあったおかげなのです。そう言いながら、こうして洗いざらい書きとめているのですが、それは私が、どんなちょっとしたきまりを作るにも十分考えており、そしてその効果を知りたいと思うからなのです。今こそ、私は、あの娘の躾を通じて進められるこの方針によって行動したいと思います。今晩はたくさん書きすぎてとりとめなくなりました。この日記に表われている私自身の気質や感情と、あの娘

のそれとが、密接に関連しているとは思いません。ただ、あの娘の安らかな寝息は、私がこうして書いている間中、私の思考を促す音楽でありました。あの娘に神の祝福がありますように！

一八三五年八月四日　火曜　夜

あの娘のことを書くのは、ずい分久し振りのように思われますし、ずっとそれをなまけてきたような感じさえします。あの娘について話したり、考えたり、書いたりする時、いつ始めていつ終えたらよいかが、とてもむずかしかっただけなのです。

数日のうちには、あの娘は十一ヵ月になりますが、ある点で、あの娘はやや発達が遅いように思います。たとえば歩行や話し言葉など。私は、あの娘が「ママ」と言っていると思うのですが、それはそんな気がするだけのことなのです。あの娘は、数分間何かにつかまってかなりしっかり立っちができ、それからペタンとしりもちをつくのです。でも、私は、あの娘が自然の成長以上に早く歩いたり、話して欲しいと気ぜわしい気持でいるわけではなく、夫も同じ様に考えているのです。私達は、あの娘なりの進み具合でよいと思っています。

あの娘には、いろんな小さなお得意の芸があります。たとえば、手をパチパチたたいたり、握手をしたり。それらはとてもかわいいものです。時々、私達はあの娘に他の人の前で芸をさせすぎているような気がして、心配なこともありますが。このことは、あの娘が成長するにつれて注意していかねばなりません。あの娘は、「牛はどこにいるの？」「はえ？」などなど、たくさんの単語や文章がわかります。私はあの娘が、怒った表情や時にはうかない表情でさえ、目にするのを、とても心配しています。私には、あの娘が今見たその表情に即座にあわせるのがわかるのです。もし、私達あるいは私が、子どもをしっかりと配慮することができたら、子どもは何と美しい、悪から守られた存在となることでしょう。ああ、私は本当にそう望みます……（著者略）

女の人生というものは、少くとも今、私にはそう思えるのですが、最も偉大で気高い義務の一つである、母親の義務を果たす時期にかかわっていかなければならないのですね。私はすでにあの娘の知的、道徳的教育の多くの事柄について、あまりにも無知であまりにも頼りげなく感じているのですから、あの娘が大きくなって子どもがよくする困らせるような質問をしたら、一体どうしたらよいのでしょう。私は今持っている志と信仰をいつまでも持ち続けたいので、私のあやまちが許されるよう、そして良い道に導かれますようにと祈らねばなりません……（著者略）喜びが苦痛の表情を伴なわないように。たぶんこんな事はばかばかしいことですが、私はあの娘に関することは、何でも書いておこうと思うのです。

あの娘は、この前私が日記を書いてからずっとナッツフォード[1]とウェリントン[2]へ行っていました。そして、ああ、ウェリントンを訪ねてから、あの娘はとても重い病気にかかってしまい、私達

はあの娘を失うのではないかと、それはそれは心配しました。私はもう本当にあきらめようともしました。もうあの娘をこの世で見ることはできないという思いにどんなに心を痛めたかは、言い表わせないほどです。

見てもむなしいあの娘のベット、
ひっそりとした子供部屋、
かつてはあの娘のはしゃぎ声で喜びに満ちていたのに。

私は神への感謝の言葉を心から発することなく口にする習慣を身につけたのではないかと、その言葉を使うのを恐れる時もあります。しかし、神が与えて下さった幸福を奪い去られないことに対して感謝と祝福をささげますと言う時には、そこに何の危具もないと思います。そして、ああ、私があの娘を寵愛の的とするのではなく、あの娘と私が共に、いつの日か来る変化に備えて努められますように。病後、あの娘の気質は、病気中に許された甘やかしによって悪くなりましたが、元気になるにつれてそれもなくなり、今はもうほとんどいつもと変わらぬ程落ち着いた気分になってきています。まあ時々は感情がひどく高ぶって、私の心をとても重くすることもありますけれど。

私は短気があの娘の最大の欠点だと言わなければなりません。さりとて、その欠点の扱い方の最良の方法を知っているわけではありません。ただ私は自分自身を落ち着かせ、短気をおこしたところで、行動の速さは少しも変わらないことをあの娘に教える一方で、不必要なものでも良い習わしである時には、あの娘をつまらなくさせないようにしたいと思います。が、こまごました事柄に、私のような優柔不断な人間が即座に決断してゆくことは、とてもむずかしいことです。でも、どの人もどの本も、決断は子どもの落ち着きに、そして必然的にその性質にとって重要な役割りを果たすと言っています。また、より良い扱い方をしようとして、子どもにあなたのためらいを見せるよりは、とりあえず、まあまあの扱い方を続ける方がずっと良いと言っています。私の言うのはただし、とりあえずのことです。将来、事あるごとにより良い方法を思い出して採り入れる沈着さを持つよう心がけなければなりません。

もう一つ、私自身が注意しようと思い、また召使達にも注意させようと思うことがあります。それは、気をそらすためにあの娘の注意をそこに無い物にむけない事、それから、約束を果たせないのに無条件であの娘と何かの約束をしないことです。勿論今では、あの娘は見慣れている人は皆わかります。以前より度は増したけれどあの娘は大そうな恥ずかしがり屋だとは思いません。しかし多くの人々は、子ども達が時々恥ずかしがるのは当然だというような、そんざいな配慮のない態度で子ども達を扱うのです。

さて今晩はこの辺で筆を置きましょう。かわいいあの娘について書くのでもなければ、再びこんなに長々と書くつもりはありません。

（津田塾女子大学）

註(1) ナッツフォードには、義叔母のラム夫人が住んでいる。
(2) ウェリントンには、夫ウィリアムの母が住んでいる。

「幼児の教育」復刻に思う

当園の園長室の書棚は、古い書がならんでいるが、いずれも、もう得難い書ばかり。その中に一パートを占領しているのがこの初版より現代までの幼児教育の合本である。勿論、見たところは古めかしく綴じもほずれているのもあるが、中は新しいとは言えないが、美しく綺麗に保存されている。

大切な書として、私も若い頃から大先輩の先生方から宝物のように言いつたえられ、いじるのもおそれ多いと思っていた。時折、他の方が研究のため、記録のためと閲覧にいらっしゃるが、鍵をかけておそるおそる取出してお見せする。

これが今回復刊された。貴重な資料が鮮明に保存される事はこの上ない重要な事で、ほっと安堵した気持だ。しかし、一つしかない宝物が、復刻版となった事は、宝物の価値が減少したちょっぴりと子どものようなへんな気持。

明治初年の幼児教育は、とパラパラと読んでみると、何と根本の幼児の考え方は現在と全然ちがわない事は驚異と感激だった。一〇〇余年の歳月は一瞬にしてちぢまってしまった感じだ。

幼児教育はほんの社会の一部分しか考えられてなかった明治初年と、幼児教育がこんなに普及された現代と、一貫した幼児に対する考えは、どういう事なのだろう、人間の進歩は、人間の変化は、人間の発達と社会の変化、時代の変化、進歩との関係はどうなのだろうか。

又、幼児教育の内容は。教育材料は、変化しているだろうか。

私共が小さい時やった材料が、あの時代から変化した、こんな事やっていたのだ、この点はちっとも変っていない、もっと考えなければ、などなど。

古い宝物の書も復刻されて私共の手元にあると、研究に記録に、現場実践に役に立つものです。

（堀合文子）

幼児の教育　第七十八巻第三号

三月号　©　定価二五〇円

昭和五十四年二月二十五日　印刷
昭和五十四年三月一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

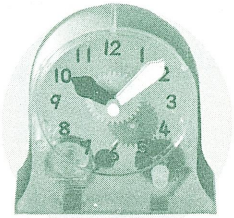
※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。

★54年度★

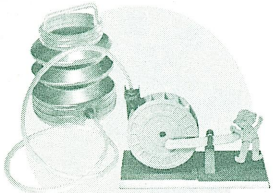
"科学する心"を育てるキンダー科学教材シリーズ

●Aセット　年間6セット 1,500円／1セット 250円

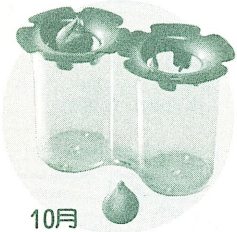
4月
さいばいセット
（朝顔・二十日大根の種付）



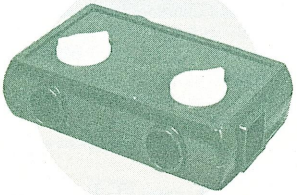
6月
とけい（はぐるま）



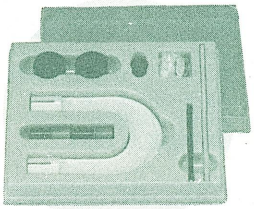
8月
すいしゃ
（折りたたみ式バケツ付）



10月
みずさいばい
（クロッカス球根付）

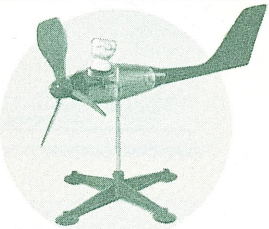


12月
かがみ（ミラーボックス）

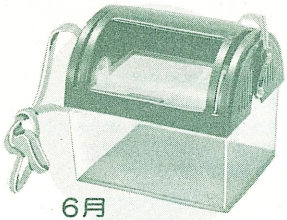


2月
じしゃく

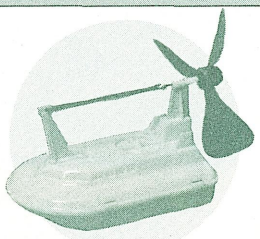
●Bセット　年間6セット 1,500円／1セット 250円



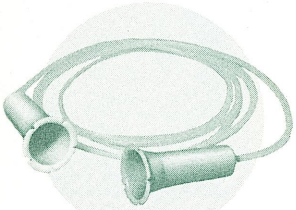
4月
かざみ（ひこうき型）



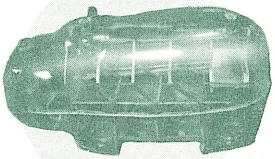
6月
かんさつケース
（むしかご兼用）



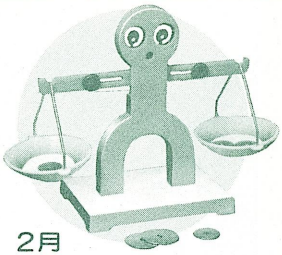
8月
ふ　ね（すいりく両用）



10月
でんわ



12月
ちょきんばこ



2月
はかり

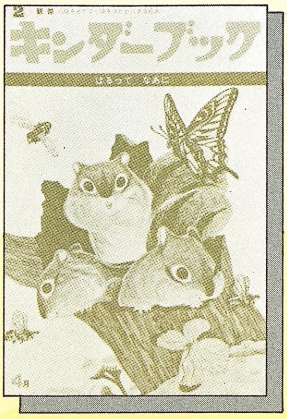
＜わしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課　TEL（03）292－7781（代）にお問い合わせください。

フレーベル館

"大きく、のびのびと、ゆたかな子どもに育ってほしい"

52年の歴史をもつキンダーブックは、今年も、より充実した内容でお応えします。

情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック1－情操
4月号 "みんな　あつまれ"
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価　月 **200円**

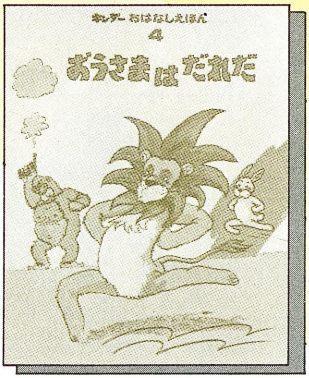


観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック2－観察
4月号 "はるって　なあに"
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価　月 **200円**

科学する心を育て自然に親しませる
しぜん-キンダーブック3
4月号 "もんしろちょう"
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価　月 **200円**

フレーベル館の
月刊7誌

幼児らしい夢をそだてる
キンダーメルヘン
4月号 "おめでとう　ぞうさん"
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価　月 **200円**



保育をゆたかにする
実践的保育専門誌 **保育専科**
4月号○自発性と自主性をたかめる保育
特集○新入・進級児指導のポイント
定価　**330円**

幼児の美しい心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号 "おうさまは　だれだ"
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価　月 **200円**

園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー
4月号　特別企画
しつけのことわざに誤りはないのかな？
☆ことわざ風しつけ勉強法☆大場牧夫
団体購読価　月 **250円**

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館